ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第123号

ひさご形土製品考～塔の祈り～ ----------関広尚世--- 1
共同研究　木津川市上狛北遺跡出土遺物の基礎的研究（１）---------筒井崇史・松尾史子--- 9
共同研究　奈良時代の灯明皿の使用実態の検討 ----------牧田梨津子・伊野近富 -- 19
平成 25 年度発掘調査略報 ---------- 25
７．大川遺跡第４次
８．出雲遺跡第16次
９．長岡京跡右京第1067次(7ANKSM-18地区)・開田遺跡・開田古墳群
10. 下水主遺跡第４次（Ｇ地区）・水主神社東遺跡第５次（Ａ－３・Ｂ－３地区）
11. 長岡京跡左京第 565 次（7ANYSK-2・YHD-2 地区）・下津城跡
12. 椋ノ木遺跡第 11 次
長岡京跡調査だより・119---------- 35
普及啓発事業 ---------- 37
「関西考古学の日」関連事業を振り返って ---------- 38
センターの動向---------- 40

2014 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

ひさご形土製品考～塔の祈り～

関広尚世

１．はじめに

京都府八幡市美濃山廃寺の調査で、非常に特徴的な土製品が出土した。図３の「ひょうたん」のような形をした土製品(以下、ひさご形土製品)は、出土数や出土状況においてその歴史的意義の重要性をより感じさせるものがあった。遺物の規格など詳細については、京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府遺跡調査報告集』第154冊　2013(以下､『美濃山報告書』)に譲るとして、本稿では、仏教史や外交史における研究成果を踏まえながら、この特殊な土製品について考えてみたい。

２．名称の由来

名称の由来について、あえて詳述しておきたい。ひさご形土製品は出土当初、寺域の範囲等を確認するための調査では大型片の出土はなく、また京都府内でも類例が認められないため、呼び名にも困る遺物であった。そこに一筋の光がさしたのは、帝塚山大学考古学研究所教授の森郁夫先生と甲斐弓子先生に遺物についての指導をいただいたときであった。森先生は遺物をご覧になり、これを「匏形(ひさごがた)」ではないかとおっしゃられた。この「匏形」は、『東大寺要録』巻第８にある「東大寺権別当実忠二十九か条事」に登場する。実忠は自らの業績を書き記しているのであるが、問題の記述は天平宝字８(764)年、僧正良弁の命で東大寺東塔の露盤を上げるという部分にある。命をうけた工人たちは露盤が重く、塔が高すぎるとして、それを上げることを躊躇した。このため、実忠が自ら露盤を上げることになった。実忠は速やかにこの作業を行い、相輪先端部分である「匏形」に最勝王経と仏舎利をおさめたというのである。相輪は宝珠・竜車・水煙・宝輪・請花・伏鉢・露盤の７つの部分からなり、「匏形」と呼んだのは宝珠と竜車であった。先の記述にもあるように舎利をおさめるくらいであるから、塔の最重要部といえる。

図１　美濃山廃寺位置図
(国土地理院　1/50,000　京都南西部)

美濃山廃寺の用途不明土製品は、以上のような経緯で「匏形」と命名された。「匏」は、他にも「瓢」･「瓠」などの別字もあるため、ひらがなで表記し､「ひさご形土製品」とした。

３．ひさご形土製品の概要

①部分名称などについて

ひさご形土製品各部の名称については、『美濃山報告書』では先端から宝珠部･一段目･二段目･最下段・結合部としていた。これは土製品先端部の形状が宝珠に類似することによる名称であった。しかし、前述したように、いわゆる金属製相輪の宝珠と混同され、誤解を招きやすい。あくまでひさご形土製品は金属製相輪の「匏形」と呼ばれた部分、ないし相輪そのものを象徴する土製品と考えられるため、図２のとおり、「頂部」としておきたい。整形技法については、『美濃山報告書』に詳しいが、出土品を観察した結果、頂部から二段目と、最下段および接合部をそれぞれ別成形し、焼成前に接合したものと考えられる。

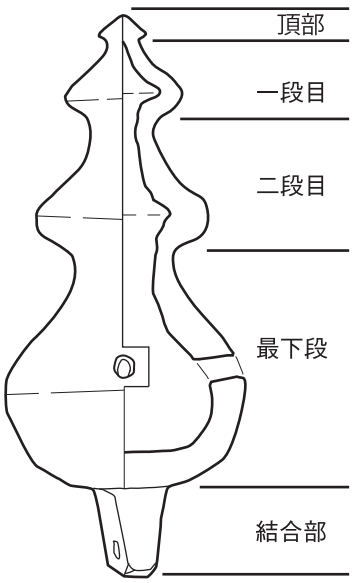


図２　ひさご形土製品部分名称

②出土状況などについて

ひさご形土製品は美濃山廃寺の７次にわたる調査で、29点出土している。ＳＢ2012の柱穴ＳＰ072では、８世紀前半と位置づけられる土器群とひさご形土製品が共伴関係にあった(図３：３)。第６次調査地Ａ地区南部からＢ地区にまたがる金堂相当施設推定地から最も多く出土しており、残存率の良い資料は銅の溶解炉ＳＬ１を築いた落ち込みＳＸ20で出土した(図３：１・２)。次いで出土量が多いのは、第７次調査地南部で検出した礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020周辺である(図３：４・５)。

関連した土製品と考えられる覆鉢形土製品も金堂相当施設推定地で出土する点はひさご形土製品と一致する。しかし、ＳＢ2020周辺ではほとんど見られず、寺域の北西部でややまとまって出土する。寺域内でのこの出土状況の差異が、「二つの土製品の機能的差異」にどれほど反映されるのかは現段階では不明である。

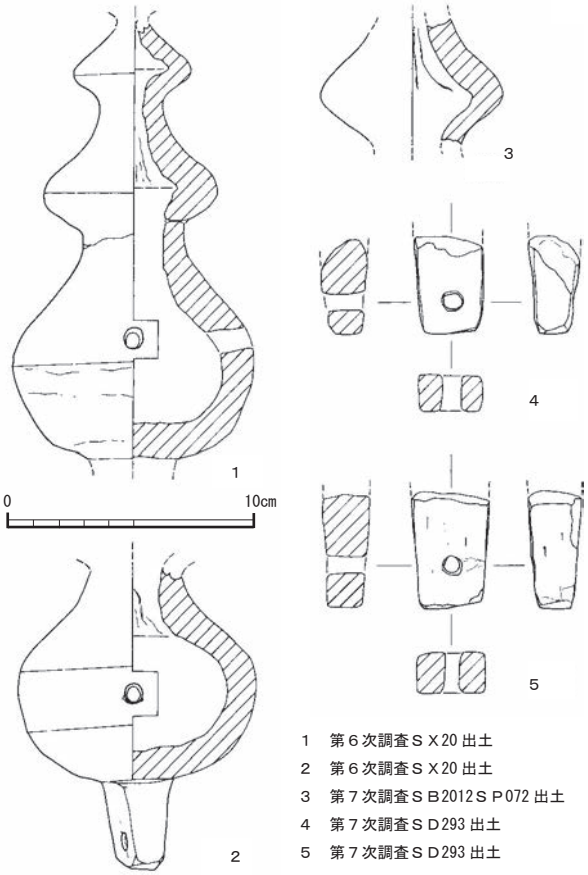


図３　美濃山廃寺第６・７次調査出土ひさご形土製品

４．ひさご形土製品の歴史的意義

ひさご形土製品は発見当初、これまでの覆鉢形土製品の評価から(大洞　2005)、百万塔的な用途が推定され、時期的にも近い時期が想定された。

しかし実際には、美濃山廃寺第６・７次調査の結果、共伴遺物や遺構の切り合い関係から、百万塔が作られた奈良時代後半よりも以前にひさご形土製品が製作されたものであることが判明した。そして、次の３つの疑問点が浮かび上がった。

Ａ．百万塔と同じように「鎮護国家を目的とした祈り」のために作られたのか？

Ｂ．日本で百万塔が作られる以前に塔の供養が行われていたのか？

Ｃ．Ａとも関係するが、官寺とは考えにくい美濃山廃寺でなぜ用いられたのか？

いずれもこの土製品が『東大寺要録』の「匏形」であるという仮定に基づくことになるが、仏教史や外交史の研究成果を踏まえて検討してみたい。

①仏教伝来と鎮護国家思想

仏教史研究において日本の仏教は、戦前まで日本仏教＝国家仏教という考え方が主流であったが、戦後になって国家権力に結びつく仏教と民衆に根付いた仏教の２つがあると考えられるようになった。少し、これらの研究を引用しながら、ひさご形土製品について考えることにする。たとえば、二葉憲香は上記の国家権力に結びつく仏教を「律令仏教」とよび、民衆に根付いた仏教を「反律令仏教」とよんだ。こうした議論は、仏教受容の初期における仏教と国家の関係を明らかにし、日本仏教史全体の分析を的確に行うための基盤形成には欠かせないものであったと評価されている(二葉　1984)。そしてこの議論で、本稿に最も関連するのは「国家仏教と評価できるのはいつの段階からか」という点である。『美濃山報告書』149～150頁では、大髙義寛が受容の画期を下記のように４期に想定した(大髙　2013)。

第１期は、蘇我馬子の発願で飛鳥寺が建立されたときである。

第２期は、舒明天皇11(639)年に舒明天皇により百済大寺が造営された段階である。

第３期は、天武・持統期である。金光明経・仁王経・金剛般若経の重視、官寺の制の確立により中央だけでなく地方寺院の建立を促進、薬師寺の造営などがその根拠とされる。

第４期は、聖武・孝謙期である。飢饉や地震、藤原広嗣の乱を契機として、短期間に集中して金剛般若経や金光明経があげられており、国分寺の造営や百万塔を製作したことが顕著な例である。

この４期の中で、国家仏教および鎮護国家思想が確立したのはどの段階と言えるか。

第１期が国家仏教の始まりとする説には、蘇我氏が仏教を受容したことをもって、国家仏教の成立とみなしてしまうことへの反論がある。あくまでこの段階の仏教受容は蘇我氏の物部氏打倒と自己政権確立のための手段にすぎず、従って飛鳥寺は国家仏教の記念碑でもなんでもない。推古２(594)年の仏教興隆の詔が第１期における国家仏教の存在を裏付ける根拠とされることもあるが、万人に対して出されたものではない。天皇の宗教的権威も仏教をもってしてではなく、伝統的な神祇祭祀にあった。これは仏教を積極的に拒絶しないという姿勢に他ならず、国家仏教と

して受容したとは到底いえない(二葉　1984)。他方、蘇我氏が仏教受容に関するイニシアチブをとることは、天皇の宗教的権威を脅かす存在となりうるものであった。

大化元(645)年の乙巳の変以後、孝徳天皇が仏教寺院建立奨励の詔を出し、蘇我氏から仏教の継承を行おうとしたのも、あくまでも「天皇の民族宗教的権威の新しい体制を確立」(二葉1984：41頁)や「寺院造営にかかわる諸技術の継承」(森・甲斐　2012：74頁)なのであって「国家仏教の成立ではない」ということである。となると、百済大寺が造営された舒明天皇11(639)年を画期とする第２期も「仏教に対する考え方、思想に少しずつ変化がみられる」(森・甲斐2012：12頁)が国家仏教および鎮護国家思想の成立期としては適切でないと言える。そして、第４期の聖武・孝謙期は国家仏教の確立に異論がない時期といえるため、同思想が確立されたと言えるのはやはり、第３期の天武・持統期ということになるだろう。先に掲げたＡとＢを考える材料として、「国家仏教や鎮護国家が確立したのは天武・持統期」という点をあげておきたい。

②塔供養の始まりと伝来

ひさご形土製品は、前述したように相輪を構成する宝珠と竜車部分を表していると考えられる。出土遺物の中に塔の本体に相当するような破片が確認できないことから、本体部分が木製であった可能性が高い。これらの塔は、覆鉢形土製品とともに塔そのものないし塔の一部と考えられ、造塔供養が美濃山廃寺で行われたことを示す文物である。木製であるが、日本では称徳天皇の発願で造られた百万塔がこれまでに知られた例である。百万塔は塔身部と相輪部からなり、塔身部の相輪下中央に２～３cm、深さ８～９cmの穴を穿ち、その中に無垢浄光大陀羅尼経(以下、無垢浄光経)を納めるのが一般的である。

無垢浄光経はそもそも「罪を取り払い、延命招福を目的とした経典」であり、本稿のキーワードの一つである「鎮護国家」だけを目的とした経典ではない。鎮護国家を主たる目的とした経典には、『美濃山報告書』140～142頁でも述べたように「金光明最勝王経」「仁王経」「法華経」などがあり、造塔供養には「宝篋印陀羅尼経」「菩提場陀羅尼経」「法華経」などがある。つまり、特に無垢浄光経が鎮護国家思想とは絶対的な関係にあるわけではないが、湯浅吉美は百万塔に同経が納められる根拠として「ごく短い陀羅尼」で構成されていたことをあげている(湯浅2005：224頁)。

この無垢浄光経の原典はサンスクリット語で書かれており、704年に漢訳された。『開元釈教録』第９巻には、トカラ出身の三蔵弥陀山とソグディアナ出身の法蔵が翻訳を行ったとある(古松2006：151頁)。注目すべきはこの漢訳後の無垢浄光経の伝播の迅速さである。表１に示すように漢訳が終了した翌々年には、新羅皇福寺の石塔舎利容器の銘文から無垢浄光経の存在がうかがえる。経典の実物こそ存在しないが、同教による造塔供養が漢訳後間もなく新羅で行われたということができる。そして、鷲棲寺では塔出土の石盒に867年を示す銘文があることから、長期間にわたって同経による造塔供養が行われ続けたということができる。表１は、新羅寺院の塔に無垢浄光経とともに納められた舎利容器や仏像の内容を示しているが、それらとともに小塔や土塔なども比較的多数納めていることがわかる(国立中央博物館　1991：169～173頁)。さらに塔と伽藍

配置についても言及しておきたい。塔には木造のものと石造のものがあるが、通常、新羅時代に入ると一塔式の伽藍配置から双塔式の伽藍配置へと変化する。前者は皇龍寺・芬皇寺、後者は四天王寺・望徳寺塔に代表される。一方、こうした伽藍配置に則らない塔も存在する。むしろ、無垢浄光経による塔がこの傾向にあるといえる。たとえば、皇福寺では塔が金堂の主軸から西へ外れたところにある。昌林寺塔も伽藍配置に則らない。また、「無垢浄塔」である場合は塔だけでも造立することから、慶州南山の仏跡にみられる「伽藍配置とかかわりのない場所にたつ単独の塔」がそもそも無垢浄光経と関係がある塔ではないかと述べている（榧本　1980：304～305頁）。

本項でも先に掲げたＡ・Ｂを考える材料として、「８世紀初頭に塔を造ることによって功徳を得る無垢浄光経が新羅に存在した」ことを掲げておきたい。

③美濃山廃寺の位置づけ

美濃山廃寺は伽藍配置や立地のほか、ひさご形土製品以外の出土遺物についても特徴的な寺院である。以下、簡単に述べてみたい。

『美濃山報告書』329～332頁で報告したように、美濃山廃寺ではいわゆる「僧地」と「仏地」（上原　1986）の区分が可能で、掘立柱建物群のある丘陵南東端に創建期の軒丸瓦などが多数出土す

表１　無垢浄光経を埋納する新羅寺院と他の舎利荘厳具（国立中央博物館 1991 より一部編集・加筆）

時期	寺院名	主体部				出土場所
		舎利容器	経　典	塔	仏　像	
三国時代	皇龍寺址 九層木塔址	・青銅製円筒形舎利容器、青銅方形舎利容器、金舎利盒、銀舎利盒（推定） ・金銅舎利外函片、金銅舎利内函（刹柱本記、871 年）、銀製唐草文舎利盒（高麗）、金銅八角円堂形舎利容器、銀製小円盤等	無垢浄光大陀羅尼経（銘文中）			塔心礎石方形舎利孔
統一新羅	皇福寺址 三層石塔	・舎利（４粒）、瑠璃瓶、金製四角盒、銀製四角盒、金銅舎利外函、石函	無垢浄光大陀羅尼経一巻（銘文中　706 年銘）		金製如来立像 金製如来坐像	２層屋蓋石方形舎利孔
	仏国寺釈迦塔	・舎利（46 粒、緑瑠璃舎利瓶、銀製舎利内盒、銀製舎利外盒、金銅方形透彫舎利外函、石函 ・舎利（１粒）、朱漆香木舎利瓶、金銅長方形舎利盒、石函	無垢浄光大陀羅尼経	小木塔（12）		
	山清石南寺址 永泰二年銘	・蝋石製舎利壺（銘文） ・青銅製方形盒	無垢浄光大陀羅尼経（銘文中）			毘盧遮那仏台座中台石
	奉化西洞里 東三層石塔	舎利（３粒）、緑瑠璃舎利瓶、蝋石製壺、石函	無垢浄光大陀羅尼経	土塔（99）		１層塔身上面 方形舎利孔
	昌林寺址石塔 （記録による）	銅製経筒、銅製容器	無垢浄光大陀羅尼経			初層塔身舎利孔
	伝大邱桐華寺	蝋石製舎利壺	無垢浄光陀羅尼経	蝋石製 小塔（53）		伝大邱桐華寺塔
	桐華寺金堂庵西塔	鍮製舎利盒	無垢浄光陀羅尼経	青石小塔（99）		初層塔身方形舎利孔
	鷲棲寺三層石塔	蝋石製舎利壺	無垢浄光陀羅尼経（867 年銘）			塔内
	海印寺妙吉祥塔		無垢浄光陀羅尼経	小塔（157）		一柱門前吉祥塔
	禅林院址 三層石塔		無垢浄光陀羅尼経	蝋石製 小塔（64）		基壇下
	公州東院里 三層石塔		無垢浄光陀羅尼経	蝋石製 小塔（7） （基壇部）		基壇部；初層塔身石 円形舎利孔
	昇安寺址 三層石塔	緑瑠璃舎利瓶、黄銅製有蓋盒、石函	無垢浄光陀羅尼経			初層塔身円形舎利孔

る空閑地が存在することから、そこを金堂相当施設に推定している。しかし、伽藍を整備した明瞭な痕跡には乏しいのが現状である。

次に立地について述べる。久世郡や相楽郡では古北陸道沿いに寺院が分布するのに対し、美濃山廃寺は古山陰道と古山陽道沿いに立地しており、交通の要所にある。久世郡や相楽郡に高句麗系の集団が集住したこと(井上　2010)を考慮すると、綴喜郡においても渡来系集団や彼らの持つ情報が集まりやすい環境にもあったといえる。

３つめに美濃山廃寺で出土した瓦の特徴についても触れておきたい。これまで南山城地域の相楽郡・久世郡で、のちの奈良街道沿いにあたる地域では川原寺式軒丸瓦の分布がみられるのに対し(森　2010、森・甲斐　2012)、綴喜郡では同式軒丸瓦の分布がみられないとされてきた(中島　1997：46頁)。美濃山廃寺についても例外ではない。さらに美濃山廃寺Ⅰ式軒丸瓦は渡来系氏族による造営とされている大阪府枚方市九頭神廃寺から出土した新羅系軒丸瓦と同文であることが判明している。

上記のような伽藍配置・立地・出土遺物の特徴から総合すると、疑問点Ｃを考える材料として、「当時の最先端の情報は入るが、官寺としての機能はなく、渡来系の文化または渡来人の影響が強い寺院像」が浮かび上がってくる。

④ひさご形土製品から見た美濃山廃寺像

疑問点Ａ～Ｃからひさご形土製品の歴史的意義を考えると次の３点に集約されてきた。

まず、ひさご形土製品が作られた時期の仏教史的背景には、国家仏教および鎮護国家思想の確立があるということ。一方で、無垢浄光経の本来の目的を考慮すると、鎮護国家思想が直ちにひさご形土製品と相関関係を持つとはいえない。これはすなわち、日本における仏教受容の多様性を示していると考えられる。

第２に新羅では、日本で百万塔供養が行われた時期をさかのぼる８世紀初頭にすでに造塔供養が行われていたということである。第３には美濃山廃寺が官寺ないしそれに相当する役割を担った寺院とはいいがたいが、渡来系の文化(とくに新羅)を享受した寺院である可能性が高いという点である。これらとひさご形土製品の出土状況や年代も総合すると、少なくとも美濃山廃寺は、

「８世紀初頭に新羅から造塔供養の概念が持ち込まれ、実際にそれが行われた寺院」

ということができる。しかも、純粋に国家仏教や鎮護国家思想に基づいた造塔供養というよりも特定氏族が自らのために造塔供養を行ったと考えられるのである。

５．おわりに

４－①では「天武・持統期に国家仏教、鎮護国家思想が確立した」とした。最後にひさご形土製品の時代的背景として、もう一つ別の要素を加えておきたい。

天武・持統期には、孝徳・斉明・天智期に遣唐使が計６回送られたのに対して、文武期の702年に再開するまで、一度も遣唐使は送られていない。遣唐使の往来がなければ、あたかも文化的な交流が存在せず、仏教の日本への影響も少ないかのように考えがちである。

しかし、天武・持統期には各11回ずつ、文武期には３回、新羅からの来日が確認されている。この交渉には唐との中継という意味合いが多分に含まれていたが、新羅からの影響も受けた面は少なくないと考えられている。『日本書紀』には、持統天皇２(688)年に新羅から仏像が献ぜられたとあり、同３(689)年には阿弥陀如来、観音・勢至両菩薩像が献ぜられるとある(毛利　1975)。また、唐への学問僧が新羅使ないし新羅送使に同伴したともいわれており、仏像・仏具および仏教思想が伝わる十分な素地があったということができるだろう。発掘調査の成果から、美濃山廃寺の創建は７世紀末から８世紀初頭と考えられるが、まさにこの新羅との往来が盛んな時期の創建であったことに注意したい。

無垢浄光経が漢訳され新羅に伝わるのは706年であるが、そこから日本へほぼ間を置くことなく伝わり、造塔供養が行われたのではないかと推測される。時期的には遣唐使が再開した直後ともいうべき年代ではあるが、寺院の設立時期から考えると直接的影響は考えにくい。そして、当時の新羅人が航海技術に長け、東アジアで広く活躍していたことを考慮すると、文献史料に現れない文化的交流が存在した可能性は十分にある。

ひさご形土製品とはすなわち、文献史料に現れない仏教文化の伝播を物的に示すものであり、美濃山廃寺そのものも歴史の「表舞台」を支えた当時の新羅文化ないし新羅人から、強い影響を受けた寺院であったことを示すものであるといえる。それゆえにひさご形土製品は美濃山廃寺を象徴するのではないだろうか。

（せきひろ・なおよ＝当調査研究センター調査課調査第３係調査員）

【塔の祈り】

本稿を通して、溶解炉ＳＬ１で「未知の土製品に遭遇してしまった」私に多くの助言と励ましをくださった森郁夫先生と田代弘氏のお二人の故人に心より感謝します。森先生にはまずこの土製品に名前を与えてくださったこと、そして、田代さんにはこの土製品の出土状況解釈や年代観構築へとお導きをいただきました。お二人にはこのひさご形土製品についてまとめることを約束しながら、ご存命中に達成できなかったことが残念です。

まだまだ、検討の余地のある論の展開になったかもしれませんが、美濃山廃寺を最も特徴づける文物－ひさご形土製品にお二人のご冥福を祈る気持ちをのせて。合掌。

【謝辞】

本稿作成にあたり、次の方々にもお世話になりました。記して感謝いたします。

上原真人・大竹弘之・甲斐弓子・長谷川透

参考文献

伊野近富・関廣尚世「美濃山廃寺第６次発掘調査の成果と銅溶解遺構の概要について」(『京都府埋蔵文化財情報』第117号　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2012

石田茂作「土塔について」(『考古学』第17巻第６号)　1927

井上満郎「古代南山城と渡来人－馬場南遺跡文化の前提－」(『京都府埋蔵文化財論集』第６集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2010　191～198頁

梅原末治「戦後の韓国における仏塔舎利具の諸出土品について」（『史迹と美術』第 399 号）　1971
上原真人 「仏教」（『岩波講座日本考古学』４　岩波書店）　1986
小笠原好彦「九頭神廃寺の性格と造営氏族」（『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版）　2005
洪淳昶「７・８世紀における新羅と日本の関係－仏教文化との関係を中心とした－」（『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』　吉川弘文館）　1975　265 ～ 304 頁
国立中央博物館編　『仏舎利荘厳』国立中央博物館　1991
古松崇志「慶州白塔建立の謎をさぐる－ 11 世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物－」（『遼文化・遼寧省調査報告書　2006』　京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」）　2006
筒井崇史・関広尚世ほか「美濃山廃寺第６次・美濃山廃寺下層遺跡第９次」・「美濃山廃寺第７次・美濃山廃寺下層遺跡第 10 次」（『京都府遺跡調査報告集』第 154 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2013
大洞真白「美濃山廃寺出土の覆鉢形土製品について」（『古代摂河泉寺院論集』第２集）　2005
大髙義寛「仏教施策からみた南山城地域の古代寺院」（「美濃山廃寺第６次･美濃山廃寺下層遺跡第９次」『京都府遺跡調査報告集』第 154 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2013
竹原伸二『九頭神遺跡―九頭神廃寺―』（『枚方市文化財調査報告』第 32 集　枚方市教育委員会）　1997
筒井英俊編　『東大寺要録』　全国書房　1944
同志社大学歴史資料館編　『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査報告　第９集　2010
斎藤忠　『新羅文化論攷』吉川弘文館　1973
二葉憲香『日本古代仏教史の研究』　永田文昌堂　1984
中井真孝『日本古代仏教制度史の研究』法蔵館　1991
中島正「山背の古墳と寺院」（『季刊考古学』60 号　雄山閣）　1997
中根勝『百万塔陀羅尼の研究』　八木書店　1987
榧本杜人『朝鮮の考古学』　同朋舎　1980
毛利久「白鳳彫刻の新羅的要素」（『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』　吉川弘文館）　1975　113 ～ 145 頁
宮城洋一郎『日本古代仏教運動史研究』永田文昌堂　1985
森郁夫『東大寺の瓦工』臨川書店　1994
森郁夫『日本古代寺院造営の諸問題』雄山閣　2010
森郁夫・甲斐弓子『僧寺と尼寺』帝塚山大学出版会　2012
八幡市教育委員会『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 31 集　2001、同第 32 集　2002
湯浅吉美「百万塔の思想的背景－南都仏教史における位置づけを考える－」（『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』　第５号）　2005

共同研究

木津川市上狛北遺跡出土遺物の基礎的研究（１）

筒井崇史・松尾史子

１．はじめに

平成22年度に調査を実施した木津川市上狛北遺跡では、奈良時代中頃の南北溝や掘立柱建物、土坑などを検出し、土器類のほか、木簡・墨書土器・製塩土器など多数の遺物が出土した。(注１) 特に須恵器・土師器には都城域で出土する土器類と同じ特徴が認められた。また、木簡や製塩土器には、各地から持ち込まれたものや交流を示すものがあるなど、官衙的な様相も認められる。

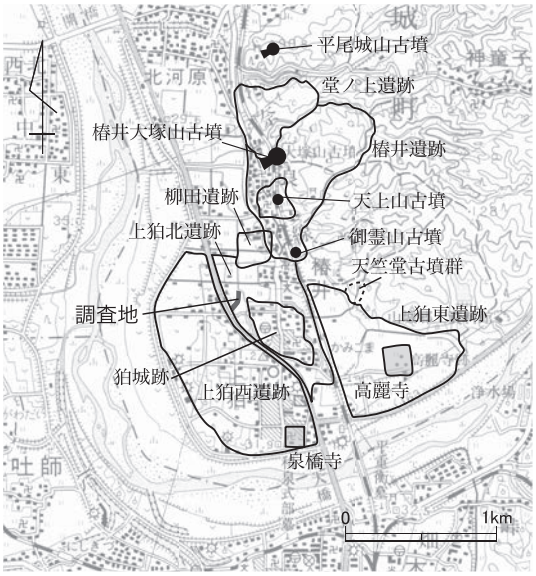
本共同研究は、表題に示したような名称のもと、上狛北遺跡で出土した遺物を各地のものと比較検討することで、上狛北遺跡で検出した遺構の性格を明らかにすることを目的として、平成23・24年度の２か年にわたって実施した。

２．上狛北遺跡出土土師器の検討－特に杯皿類－

まず、上狛北遺跡で出土した遺物のうち、遺構の時期決定の上で重要な指標となる土器類、その中でも土師器の杯皿類に着目して検討を加えることとしたい。以下では、上狛北遺跡出土土師器の概要を述べるとともに、当該期の年代決定基準である平城宮・京出土土師器と、上狛北遺跡と密接に関わる可能性が高い恭仁宮跡出土土師器を取り上げ、上狛北遺跡検出遺構の時期を明らかにする。

１）上狛北遺跡出土土師器の概要

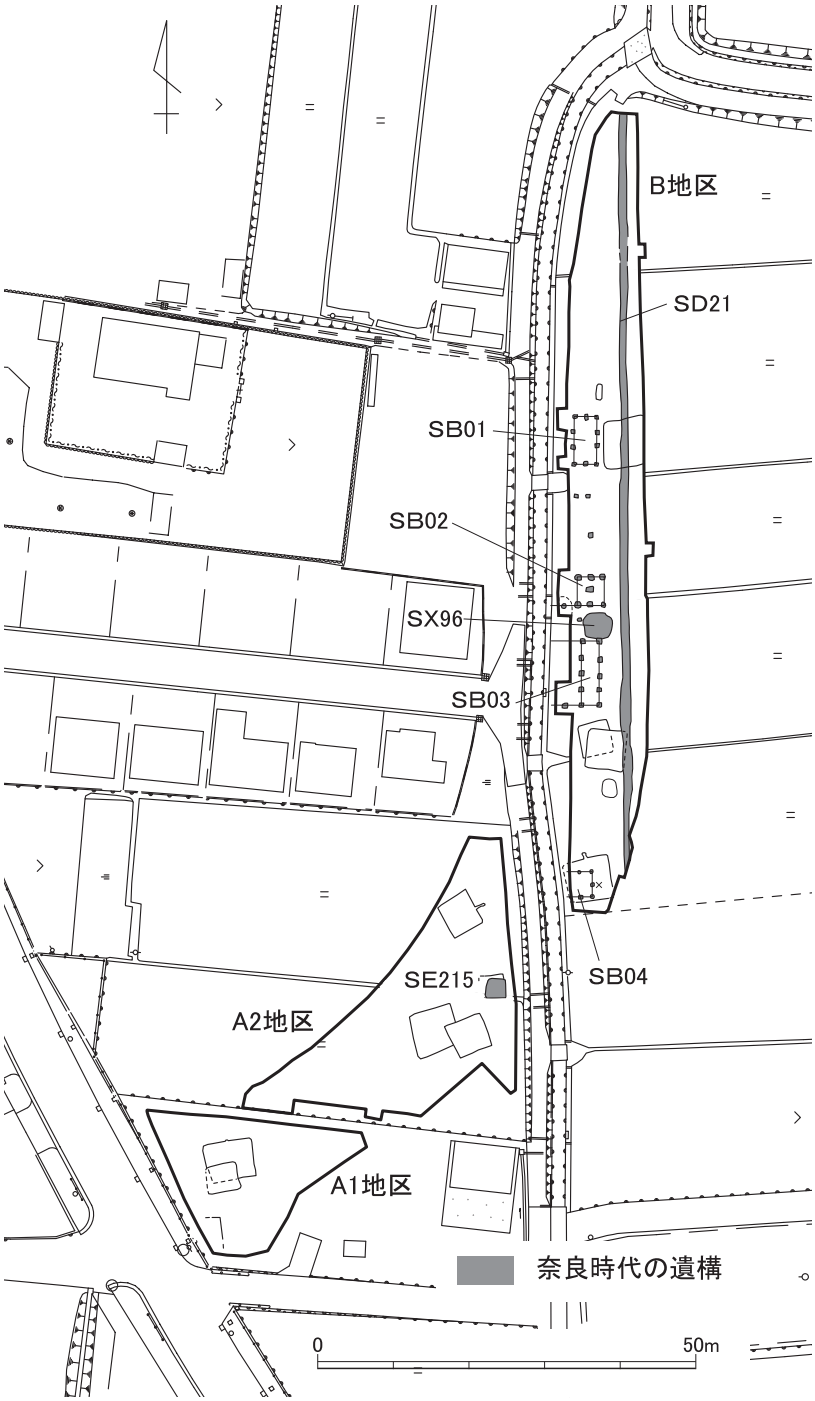
上狛北遺跡の調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴って実施したものである（第２図）。調査の結果、中世、奈良時代、古墳時代中・後期の３時期の遺構・遺物を確認した。ここでは代表的な奈良時代の遺構と、そこから出土した土器類の概要について簡単にまとめたい。



第１図　上狛北遺跡位置図

井戸ＳＥ215　平面形がほぼ方形を呈し、一辺2.1ｍないし2.5ｍを測る。検出面からの深さ約3.4ｍで湧水層と思われる砂層に達した。遺物は最上層から、土師器杯Ａ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ蓋・杯Ｂ・鉢Ｄなどが出土した。(注２) 土師器杯Ａは内面に暗文を施す。

土坑ＳＸ96　平面形は、やや不明瞭な点もあるが、ほぼ方形を呈し、南北長3.5m、東西長3.9mで、深さは最大で1.9mを測る。埋土は下層から、①大量の木屑や加工木に混じって、木簡や削り屑が少量の土器とともに出土した木屑層、②大量の炭や焼けた木材などとともに、墨書土器・須恵器・土師器などの土器類、製塩土器、瓦塼類のほか、銅椀片、鉱滓などが出土した炭層、③土坑を最終的に埋め立てた整地層、の大きく３層に分けることができる。炭層出土遺物の量は膨大で、炭層の厚さが限定されることから、これらの遺物と炭などは一時に大量投棄されたと考えられる。



第２図　上狛北遺跡主要遺構配置図

ＳＸ96から出土した土師器杯皿類には、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂなどがある（第３図）。杯Ａは大きく２種の法量が認められる。外面調整[注3]は、a0手法が最も多く、次いでb1手法が多い。内面の暗文は１段斜放射暗文と螺旋暗文の組合せが基本で、螺旋暗文を施さないものもある。斜放射暗文には粗密があり、密なものの方が多い。螺旋暗文はほとんどが二重ないし三重である。また、口縁端部内面に連弧文がみられるものもある。杯Ｃには法量分化はみられない。外面調整は、a0手法とb1手法があり、ほぼ同じ割合である。内面の暗文は１段斜放射暗文と螺旋暗文の組合せが基本である。斜放射暗文は密で、螺旋暗文は二重ないし三重である。また、口縁部内面に連弧文がみられるものがある。皿Ａ

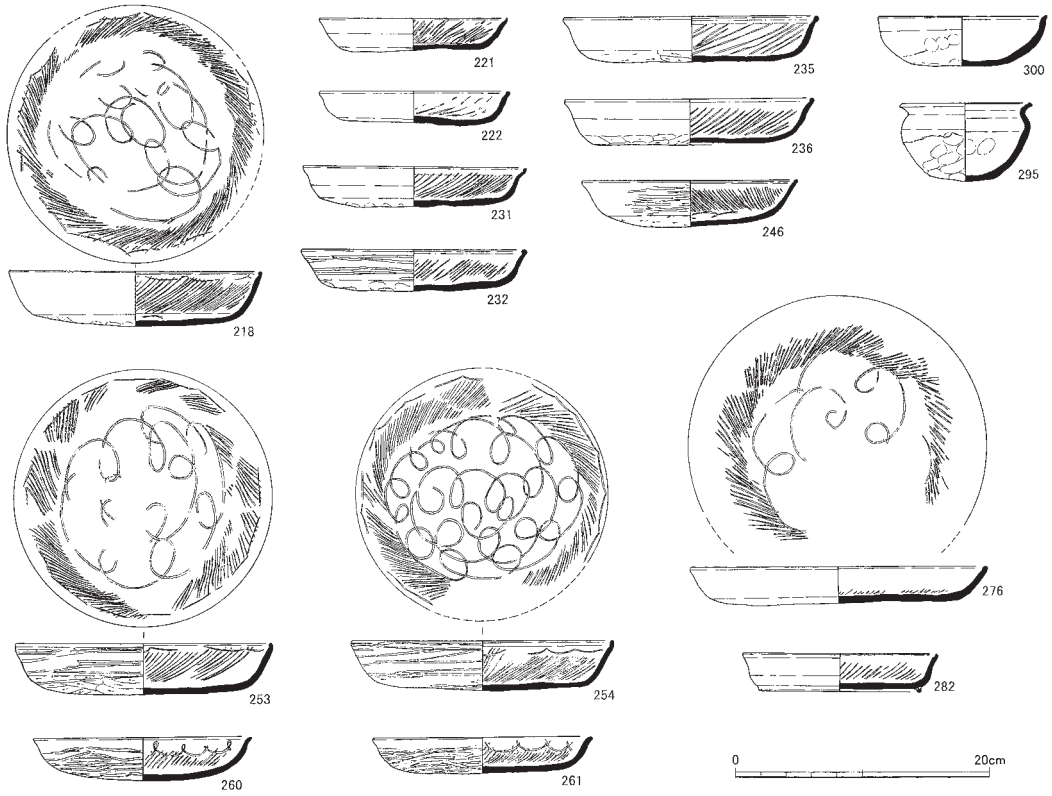
は大きく３種の法量が認められる。外面調整にはa0手法やb0手法があり、a0手法が多い。内面の暗文は１段斜放射暗文と螺旋暗文の組合せが基本である。杯Ｂはいずれもb0手法で、口縁部内面には１段斜放射暗文が施されるが、螺旋暗文はあるものとないものがある。皿Ｂは１段斜放射暗文および螺旋暗文を施す。このほか、出土した土師器としては高杯や椀Ｃ、壺Ｂなどがある。高杯には杯皿類と同様に、斜放射暗文と螺旋暗文を施したものがある。

なお、土師器杯皿類のほかに、ＳＸ96から出土した遺物として注目されるものには、木簡、瓦塼類、墨書土器、製塩土器などがある。これらについては次号以降で改めて検討したい。

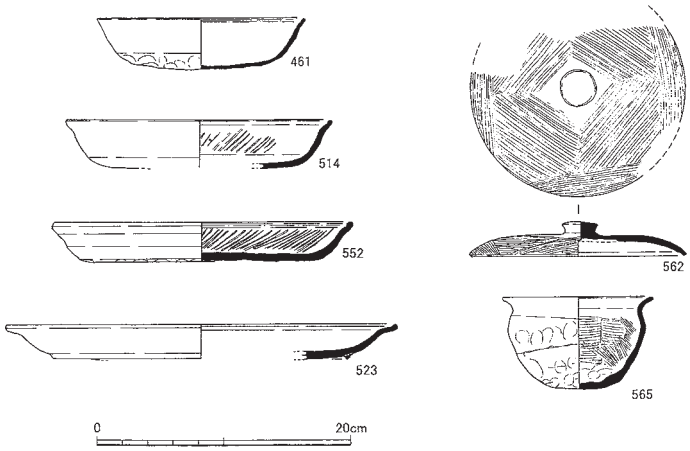
溝ＳＤ21　調査区を縦断する溝で、総延長100m以上、幅0.7～1.1m、深さは0.1～1.0mを測る。水の流れていた痕跡は明確には認められなかった。ＳＤ21の方位は、北に対して１°西に振る。

遺物の出土量は地点によって異なり、溝の北側1/6程度の範囲は、範囲が狭いにもかかわらず多数の遺物が出土した。溝の南側1/3程度の範囲でも、ややまとまった遺物の出土がみられた。両者の間の範囲では、出土遺物が少なく、10mにわたって遺物が全く出土しなかった箇所もあった。出土遺物としては多数の土師器・須恵器のほか、製塩土器が少量出土した。

ＳＤ21から出土した土師器の杯皿類には、杯Ａ、皿Ａ・Ｂなどがある（第４図）。杯Ａは法量から大きく２つに分類できる。外面調整には、a0手法、a1手法、b0手法が確認できる。内面には１段斜放射暗文および螺旋暗文を施すが暗文を施さないものもある。皿Ａは法量から大きく２つに分類できる。外面調整は、大半がa0手法である。内面に１段斜放射暗文と螺旋暗文を施すが、暗文を施さないものもある。皿Ｂの外面調整は、b0手法で、内面の暗文は不明である。このほか、



第３図　上狛北遺跡土坑ＳＸ 96 出土土師器杯皿類



第４図　上狛北遺跡溝ＳＤ21出土土師器杯皿類

出土した土師器としては、高杯や杯Ｂ蓋、壺Ｂなどがある。

掘立柱建物ＳＢ01～04

ＳＢ01は、柱間が不揃いであるが、東西２間（2.8m）、南北３間（6.2m）の南北棟建物である。ＳＢ02は、東西２間（3.2m）、南北１間（3.6m）の建物である。ＳＢ03は、東西１間（2.0m）以上、南北４間（8.5m）の建物で、少なくとも東側に廂を持つ。身舎の大半は調査区外に位置する。ＳＢ04は、東西１間（1.6m）以上、南北２間（3.3m）で、東西棟建物と推定される。

これらの建物の主軸は一致せず、北に対して西に1.5°から東に1.5°ほどの触れ幅がみられる。遺物はそれぞれの建物の柱穴から須恵器や土師器の破片が出土しているものの、時期を決定できるようなものは少ない。土師器の杯皿類についても小破片であったり、摩滅が著しいなど、ＳＸ96やＳＤ21との比較が困難なものが多い。

２）平城宮・京出土土師器との比較検討

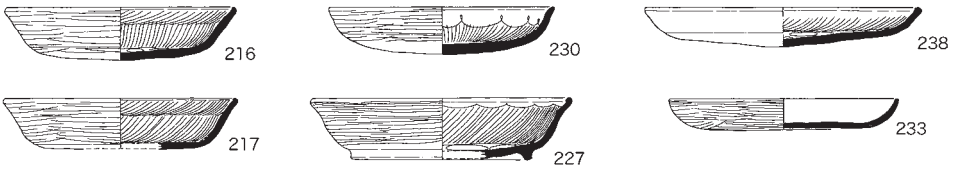
上狛北遺跡出土土器はその特徴から奈良時代中頃のものであると想定されたことから、その具体的な年代を明らかにするため、平城宮土器編年Ⅱ～Ⅳの基準資料となっている土師器の杯皿類との比較検討を行った[注4]（第５図）。

長屋王邸井戸ＳＥ4770　「長屋皇宮」と記した木簡が出土した井戸である。出土した土師器の杯皿類には杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂなどがある。外面調整は、杯Ａ・Ｂはa1・b1手法のものが多く、皿Ａはa0手法のものが多い。内面の暗文は、杯Ａ・Ｂは２段斜放射暗文のものが多く、皿Ａは１段斜放射暗文が多い。霊亀３＝養老元（717）年の紀年銘木簡が出土しており、平城宮土器編年Ⅱの基準資料とされる。

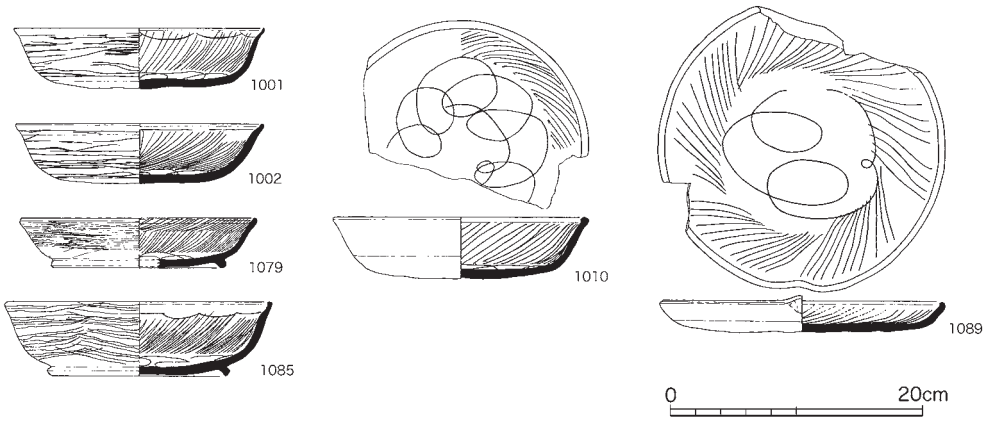
二条大路濠状遺構ＳＤ5100・5300・5310　二条大路の南北両側溝に沿って掘られた遺構で、同時期のものと考えられているが、ここではＳＤ5100に代表させて述べることにしたい。

出土した土師器の杯皿類には、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂなどがある。出土点数が膨大であるため、調整手法もさまざまで、器形ごとに異なる場合も少なくない。例えば杯ＡⅠ-1はa0手法が圧倒的に多いが、杯ＡⅠ-2ではb2手法が半数以上を占める。杯Ｃは形態差から２器種が仮に設定されており（ⅠタイプとⅡタイプ）、前者ではa0手法が圧倒的に多い（約88％）という。また、暗文も、底部内面に大きくて粗い螺旋暗文を、口縁部内面に斜放射暗文を施す例（報告ではＡタイプ暗文）、底部内面に細かくて密な螺旋暗文を、口縁部内面に細かい斜放射暗文と連弧文を施す例（報告ではＢタイプ暗文）、底部内面に螺旋暗文を、口縁部内面に２段斜放射暗文を施す例（報告ではＣタイプ暗文）などがある。このようにＳＤ5100出土資料はその内容が多様であるため、上狛北遺跡

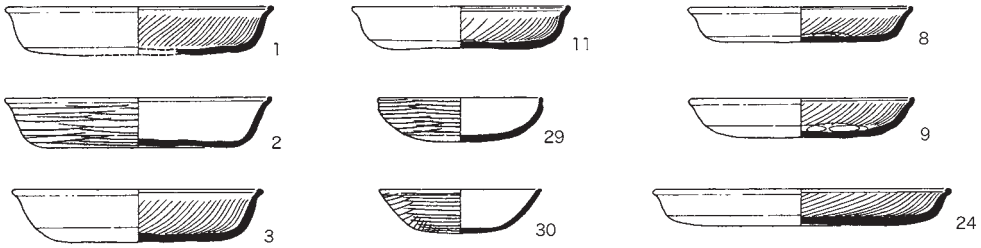
平城京左京三条二坊井戸ＳＥ4770



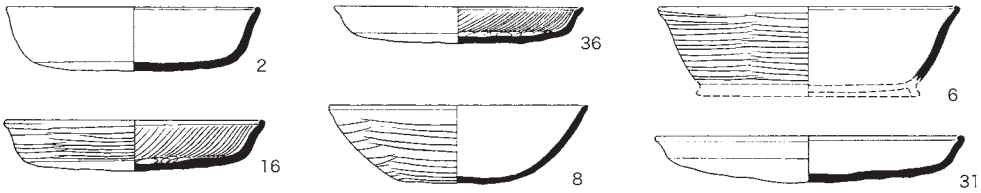
平城京二条大路濠状遺構ＳＤ5100出土土師器



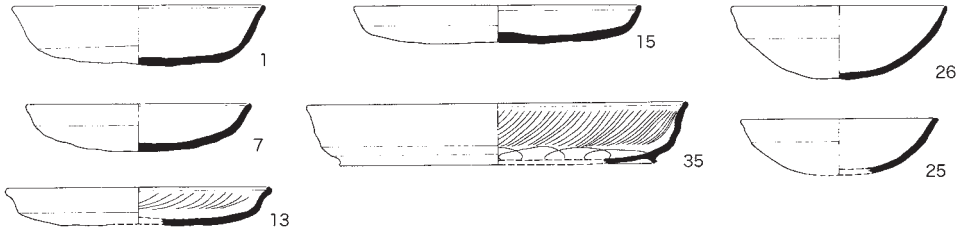
前川遺跡井戸ＳＥ１・２



平城宮土坑ＳＫ820



平城宮東楼ＳＢ7802柱抜取穴



第５図　平城宮・京出土土師器杯皿類

ではみられない要素も多く含んでいた。これらの土師器とともに出土した木簡には、天平７～９(735～737)年を主体とする紀年銘のものが多く含まれており、平城宮土器編年Ⅲの古段階の基準資料とされる。

前川遺跡井戸　調査で井戸２基ほかが検出された。井戸からは多数の土器が出土しており、ほぼ同時期のものとされる。出土した土師器の杯皿類には杯Ａ、皿Ａ・Ｂ、椀Ａなどがある。外面調整は、具体的な数値としては示されていないが、ａ手法のものが多くみられ、ｂ手法のものは少ない。また、内面に１段斜放射暗文と螺旋暗文を施すものが多い。この段階に椀Ａが出現したと考えられている。土師器杯皿類の形態や調整は次の土坑ＳＫ820と共通しているが、前川遺跡井戸が少し古く位置づけられている。このため、年代のわかる木簡資料は伴わないが、平城宮土器編年Ⅲの中段階の基準資料とされる。

平城宮土坑ＳＫ820　平城宮の調査の最初期に大量の木簡が出土したことでも有名な遺構である。本遺構は規模こそ異なるものの、上狛北遺跡の土坑ＳＸ96に良く似ているとの指摘もある(注5)。本遺構からは木簡のほか、大量の土器が出土している。土師器の杯皿類には、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂなどがある。杯皿類の外面調整はa0手法のものが圧倒的に多く、全体の65％ほどを占める。内面には斜放射暗文と螺旋暗文とを施すものが多くみられるが、施さないものもある。また、連弧文を施すものがごくわずかだが存在する。このほか、椀Ａが少量だが存在する（４％）。天平17・18(745・746)年を中心とした木簡が出土しており、平城宮土器編年Ⅲの新段階の基準資料とされる。

平城宮東楼ＳＢ7802柱抜取穴　平城宮第１次大極殿院南面築地回廊に敷設された楼閣（東楼）ＳＢ7802の柱抜取穴から出土した資料である。出土した土師器杯皿類には、杯Ａ・Ｂ、皿Ａ・Ｂ、椀Ａなどがある。外面調整はａ手法のものが多い一方、暗文を施すものがほとんど認められない。こうした特徴から上記土坑ＳＫ820と後述の土坑ＳＫ219の間に位置づけられる資料と考えられている。土器とともに出土した木簡には天平勝宝５（753）年の紀年銘を持つものがあり、平城宮土器編年Ⅳの基準資料とされる。

平城宮土坑ＳＫ219　300点以上の土師器が出土した遺構で、杯Ａ・Ｂ、皿Ａ、椀Ａなどが出土した。外面調整にはb0手法のものが多くみられるものの、暗文を施すものは非常に少なくなる。また、椀Ａが一定量存在する（約22％）。天平宝字６（762）年の木簡が出土しており、平城宮土器編年Ⅳの基準資料とされる。

平城宮土坑ＳＫ19189・19190　近年、新たに確認された遺構で、大量の木簡とともに出土した土器類がある。土師器の杯皿類では内面に暗文を施すものがほとんどみられない。宝亀２・３(771・772)年を中心とする紀年銘木簡が出土しており、平城宮土器編年Ⅳの新たな基準資料として期待される一群である。

所　見　当該期の土師器の変遷については、内面に施される暗文の変化が１つの目安となる。つまり、２段斜放射暗文（平城宮土器編年Ⅰ・Ⅱ）→連弧文＋１段斜放射暗文（平城宮土器編年Ⅱ～Ⅲ古段階）→１段斜放射暗文（平城宮土器編年Ⅲ～Ⅳ）→暗文の省略・消失（平城宮土器編年Ⅳ以

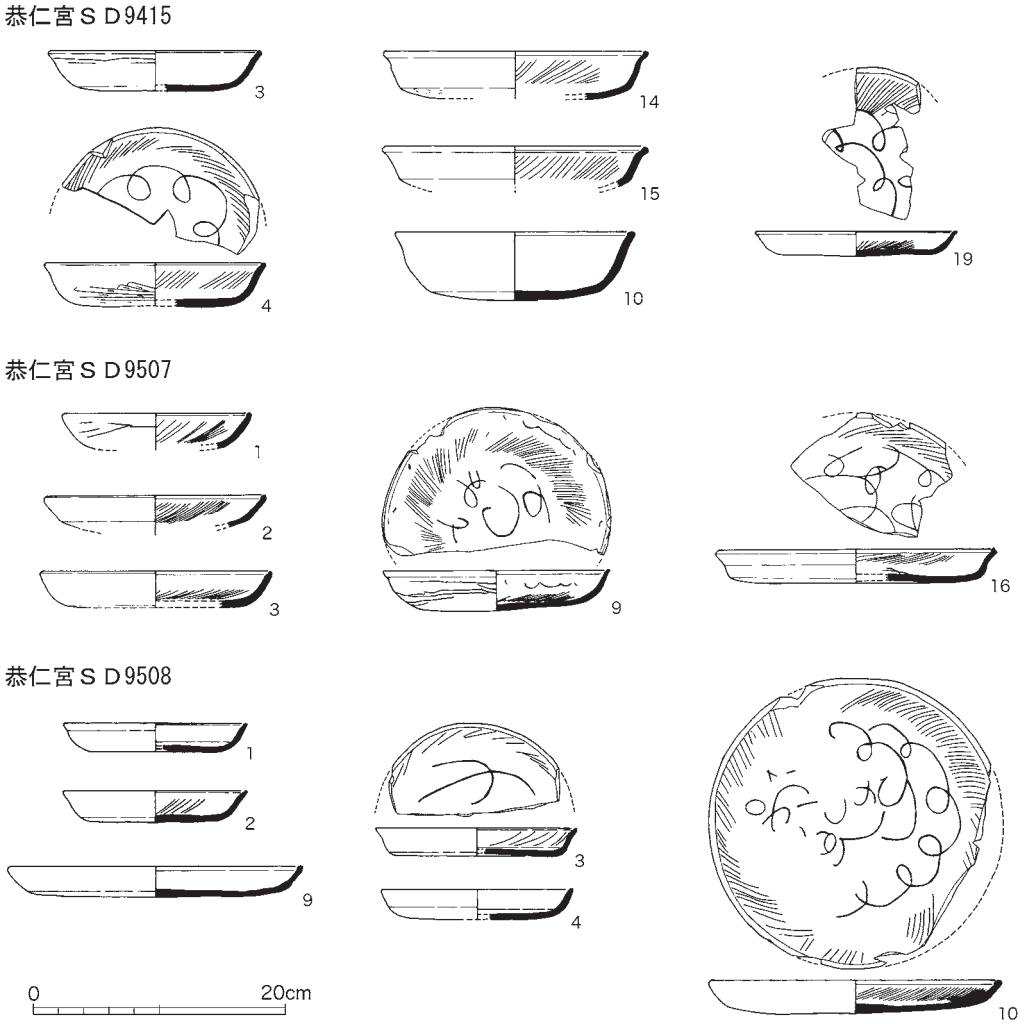
降）という変遷が考えられている[注6]。また、平城宮土器編年Ⅳ以降では、器種構成や製作技法に大きな変化が現れる[注7]。前者では椀Ａの出現と出土量の増加、後者では外面全体にケズリを施すｃ手法の多用が挙げられる。

このような特徴をふまえて上狛北遺跡出土資料との比較を行った結果、上狛北遺跡出土資料には、椀Ａやｃ手法を多用したものは認められず、平城宮土器編年Ⅳ以降の時期になる可能性はないと判断できた。また、連弧文を施すものが認められるものの、大半が１段斜放射暗文を施すものであり、調整技法上の特徴などを加味すると、平城宮土器編年Ⅲの古段階から新段階にかけてのものと考えられた。また、土師器の胎土等は平城宮・京出土土師器と比べてそれほど異なるようにはみられず、平城宮・京と同じ製作技法に基づく土師器が上狛北遺跡にも供給されていたと考えられる。

３）恭仁宮跡出土土師器との比較検討

次に、上狛北遺跡と関係があると思われる恭仁宮跡出土の土師器杯皿類との比較検討を行った[注8]（第６図）。

溝ＳＤ9415　恭仁宮北東隅の北側で検出した石敷溝から出土した土器群である。厳密には恭



第６図　恭仁宮出土土師器杯皿類

仁宮域外に当たるが、宮と密接に関連する地区と考えられている。出土した土師器杯皿類には杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂなどがある。いずれも外面調整にa0・b0・b1・b3の各手法が確認できるが、b0ないしb1手法が多いようである。ただし、資料を実見した結果、ｃ手法（口縁部の上端までケズリを施す）のものが存在することを確認した。内面の暗文は施すものと施さないものがある。これらの資料には、暗文を施さないものが一定量存在することや、ｃ手法のものが存在することなど新しい要素がみられることが注意される。また、色調については、上狛北遺跡出土資料には淡褐色や橙灰色などやや白っぽい土器と赤褐色や橙褐色などやや赤っぽい土器がそれぞれ存在するが、ＳＤ9415出土資料では後者が圧倒的に多い。

溝ＳＤ9507　恭仁宮内の西限付近の基幹排水路と考えられる溝から出土した土器群である。出土した土師器杯皿類には杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ、椀Ａなどがある。外面調整は大半がb0手法であり、前述の平城宮土坑ＳＫ219出土資料に近い。内面に暗文を施すものが多くみられる点がＳＫ219とは異なる。なお、連弧文を施すものが１点であるが認められる。上狛北遺跡と同様、器高の低いものが多い。平城宮では器高の低いものとともに器高の高いものがあり、器高の低いものが主体となるのは恭仁宮や上狛北遺跡の特徴かもしれない。土師器壺Ｂには上狛北遺跡の溝ＳＤ21と同じような器形のものがある。

溝ＳＤ9508　恭仁宮西面大路の東側溝から出土した土器群である。出土した土師器杯皿類には杯Ａ・Ｃ、皿Ａなどがあるが、杯皿類の出土点数そのものが上記２遺構に比べて少ない。外面調整はb0手法が一定量占めるようであるが、摩滅しているものが多く詳細は不明である。暗文を施しているものも少ない。報告番号４の土器は黒色土器の可能性のある資料である。また、ＳＤ9415と同様に、ｃ手法の皿がある。このような皿は、木津川市の馬場南遺跡にもみられ、同遺跡の報告では第２期に位置づけ、平城宮土器編年Ⅳ～Ⅵの時間幅で考えている。[注9] なお、ＳＤ9508の出土資料の中には、淡褐色や橙灰色などやや白っぽい土器が含まれている。

所　見　まず、土器様相の点では、ｃ手法を施すものや黒色土器の可能性もあるものが出土していることを確認した。これらの資料は、これまで、いずれも恭仁宮期のものとして報告されており、これらの土器が示す年代は恭仁宮の存続期間（740～744年）のものと理解されていた。しかし、上狛北遺跡出土資料と比較すると、恭仁宮跡出土土師器は、土坑ＳＸ96よりも新しく、溝ＳＤ21と同時期か、それ以降の資料であると考えるざるをえなくなった。したがって、土器様相の点では、恭仁宮の廃絶以降、つまり山背国分寺の段階の土器も含まれている可能性がある。これは出土遺構が溝であるために埋没までに若干の時間を要したためであろう。

３．出土土師器からみた上狛北遺跡の時期

上狛北遺跡の時期を確認するために、平城宮・京ならびに恭仁宮跡出土の基準資料との比較検討を行った。その結果、上狛北遺跡における遺構の年代を以下のように位置づけることができた。

まず、土坑ＳＸ96から出土した土師器杯皿類は、斜放射暗文が密であるものが多く、螺旋暗文が二重ないし三重であり、口縁端部内面に連弧文を施すものが一定量含まれる。これらの特徴は

二条大路濠状遺構ＳＤ5100ほか出土土師器杯皿類にみられる特徴と類似することから平城宮土器編年Ⅲの古段階に併行する資料と考えられる。

次に溝ＳＤ21出土の土師器杯皿類は、ＳＸ96出土の土師器杯皿類と比較すると、a0手法のものがほとんどであり、連弧文がみられないことや、内面の斜放射暗文や螺旋暗文が省略されるものが一定量存在することから、ＳＸ96よりも新しい様相の土器群といえる。椀Ａが出土していないことを考え合わせると、前川遺跡検出の井戸出土資料とほぼ同じか、やや新しくなる平城宮土器編年Ⅲ中～新段階の資料と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ01～04や井戸ＳＥ215は、出土遺物は少ないが、土器の様相や検出状況から溝ＳＤ21とほぼ同時期と思われる。

さらに恭仁宮跡出土土師器との比較も行ったが、恭仁宮跡出土土師器は、おおむね溝ＳＤ21出土資料に近く､場合によってはもう少し新しい段階の資料を含む可能性もあることが確認できた。従来、恭仁宮跡出土資料は平城宮土器編年Ⅲの中段階に位置づけられ、天平12(740)年から天平17(745)年にかけての基準資料とされたきた。しかし、今回の検討から、恭仁宮跡出土資料は平城宮土器編年Ⅳに併行するものが含まれる可能性が高いと考えるに至った。つまり、これらの資料は、恭仁宮廃絶期ないしその直後の資料に位置づけるのが妥当と考えられる。ただし、この段階において、平城宮で顕著になる土師器椀Ａがほとんど含まれていないのは、地域的なものによるのかは、なお、検討を要する。

以上の検討の結果、上狛北遺跡検出遺構群出土の土器類の時期は、平城宮土器編年Ⅲの古段階から新段階にかけての資料であることが明らかになった。したがって、検出した遺構の時期もおおむねこの時期であろう。これはちょうど聖武天皇が恭仁宮へ遷都する時期にあたる。宮域から離れた上狛北遺跡で恭仁宮と同時期の遺構が検出された意味については、さらに出土遺物に検討を加えて明らかにしたいと思う。

（以下、次号）

（つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査課調査第１係主任調査員）
（まつお・ふみこ＝当調査研究センター調査課企画調整係主任調査員）

注１　筒井崇史・松尾史子・谷﨑仁美「上狛北遺跡第２次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第150冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2012

注２　出土した土器類の器種名については奈良文化財研究所の分類に準じる。
神野恵「土器類」（『平城宮発掘調査報告ＸＶＩ』奈良文化財研究所学報　第70冊　奈良文化財研究所）2005　118～121頁

注３　土師器杯皿類の外面の調整名についても奈良文化財研究所の分類に準じるものとする。注２文献117頁

注４　資料調査は平成23年９月27日に実施した。資料調査にあたっては、奈良文化財研究所神野恵氏にお世話になった。記して感謝します。

注５　奈良文化財研究所渡辺晃宏氏からご指摘いただいた。

注６　平城宮土器の変遷ならびに暗文の変化については下記の文献を参照した。
西弘海「平城宮Ⅰ～Ⅶの大別」（『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報　第 26 冊　奈良国立文化財研究所）　1976、巽淳一郎「平城京土器の大別」（『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』奈良国立文化財研究所学報　第50冊　奈良国立文化財研究所）　1991、玉田芳英「平城宮土器研究の現状」（『平城宮発掘調査報告ⅩⅣ』奈良国立文化財研究所学報　第 51 冊　奈良国立文化財研究所）1993、玉田芳英「平城宮土器編年の細分」（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報　第 54 冊　奈良国立文化財研究所）　1995

注７　注６の各文献を参照した。

注８　資料調査は平成 25 年３月７日に実施した。資料調査にあたっては、京都府立山城郷土資料館森島康雄氏にお世話になった。記して感謝します。

注９　松尾史子「土師器供膳具について」（「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成 20 年度発掘調査報告　（１）馬場南遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第 138 集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2010

遺物実測図の出典

第３図・第４図　注１文献

第５図　平城京左京三条二坊井戸ＳＥ 4770・平城京二条大路ＳＤ 5100；『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究学報　第 54 冊　奈良国立文化財研究所　1995
前川遺跡井戸ＳＥ１・２；『奈良市朱雀大路発掘調査報告』奈良市教育委員会　1974
平城宮土坑ＳＫ 820；『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報　第 26 冊　奈良国立文化財研究所　1976
平城宮東楼ＳＢ 7802 柱抜取穴；『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所学報　第 40 冊　奈良国立文化財研究所　1981

第６図　恭仁宮ＳＤ 9415・9507・9508；『埋蔵文化財発掘調査概報（1997）』京都府教育委員会　1997

共同研究

奈良時代の灯明皿の使用実態の検討

牧田梨津子・伊野近富

１．はじめに

灯明皿は古代から近代まで連綿と各地で使用されてきた。しかし、灯火によって皿の色調等がどのように変化するかということに関しては、ほとんど研究がなされていない。わずかに、奈良文化財研究所による聖武天皇段階の常灯を念頭に置いた研究など(注1)があるのみである。灯明皿は日常の照明だけではなく、儀式でも使用されてきた。特に、奈良時代は文献上(注2)も多量の灯明皿を使用することが知られており、考古学の成果でも、木津川市馬場南遺跡の出土例(注3)がある。

今回の研究は、平成24年度に「奈良時代の灯明皿の使用実態の検討」と題して実施したもので、儀式での使用によって灯明皿の色調等がどのように変化するのか、この点に注目して検討するものである。

２．燃焼作業

具体的な研究方法は、元興寺で行われている地蔵会を実見し、準備や点火方法、点灯状況によって変化する灯明皿を観察することであった。

元興寺地蔵会　奈良県元興寺では毎年８月23・24日に地蔵会を開催している。この地蔵会は昭和23(1948)年に復興された行事で、現在の灯明を点じての供養は昭和63(1988)年に発意されたものである。寺の境内に約2,000枚の素焼きの灯明皿を一晩燃焼させ、これを２日間行うものである。万燈会を踏襲するともいえる大量の灯明皿を使用する地蔵会は、実際の使用状況を観察するのに適した行事である。そこで元興寺に依頼して、行事を観察し、行事終了後に使用された皿を約100枚回収し、油煙痕等を観察することとした。観察は平成24年８月23・24日に行った。

地蔵会を開催するためには多くの下準備が必要である。灯火に関しても、灯明皿を作り、乾燥させ、焼成するほか、油・灯芯・着火用具などの用意が必要である。

灯明皿作り　今回使用した灯明皿は、鎌倉時代の京都のかわらけを模倣したもので、口径12cm程度、器高２～３cmである。当日作製したものは、１か月ほど乾燥させたのち、酸化炎焼成で焼き上げられ、翌年の行事で使用される。焼き上がりは、出土した古代・中世の灯明皿と同じようである。

土器作りの内容は以下のとおりである。信楽の土を機械で捏ね、軟らかくなった粘土を切り、約130gの土饅頭を作る。その際、ひび割れのないように手で丸める。回転台に土饅頭を置き、回転させながら板で表面をたたき、平らにして成形するのである。

ここで、気をつけることは外形である。口縁部を立てて成形しないと、自重で扁平になってしまう。扁平では灯芯に着火しづらく、油を頻繁に入れなければならないのである。

点灯　灯芯はイグサを使用していた。表皮を剥いだ直径３～５mm程度の茎を10cmほどの長さに切って、灯火で使用する菜種油に半日つけておく。これを３本ほど束ねて灯明皿に入れ、ろうそくの火で点火するのである。

灯火の準備は、まず境内の通路の端に、土器を１列に配置する。土器を置く場所がなくなった場合は２列、３列と置く場所を広げた。

点灯は16時頃から灯芯の入った皿から行われた。皿に油を半分ほど入れ（写真１）、灯芯は皿の中央あたりから口縁部にあげる。芯の先端を数mm程度口縁端部の外に出しておく。着火は、着火棒などろうそく以外のものの使用も考えられるが、今回はろうそくの火を口縁端部の外側から灯芯に近づけ、着火した（写真２）。儀式の始まる17時にはほぼ点火が完了していた。ただし、初日の８月23日は、17時前に夕立があり、18時までには上がったものの、1,000個を超える灯明皿の中で、10個程度しか火が残っていなかった。儀式は予定通り始まったものの、その後の全面再点火に19時過ぎまでかかった。これは、雨によって油と水が混じって着火しづらくなること、灯芯が濡れると点火が難しくなることが要因である。消えたものについては、新たに油と灯芯を入れた。

写真１　油入れ作業状況

写真２　点火状況

写真３　着火によるろうの痕跡

また、２列、３列と置いた場所での点火作業は皿同士が近いために点火しにくく、皿の配置にあたっては点火作業のしやすい間隔が必要であることがわかった。

２日目には同じ条件下で灯芯の違いによって生じる変化についても調査した。麻紐と麻布（麻100％）を灯芯として使用し、イグサを使用したものと同様に点火した。この２種は安定して燃焼し、イグサに比べて灯芯を引き出す手間がかからないことがわかった。なお、黒色の煤などの痕跡はわずかについただけで

あった。

灯芯は口縁部から少し出されており、灯芯に火がなかなかつかない場合は、長時間ろうそくを近づけることにより、器の外面が黒く焦げる。このような痕跡は多くの灯明皿で観察できた。外面の焦げとそれに伴うろうの落ちた痕跡が各所にあった(写真３)。

点火後は、火を維持するために油を皿の半分ほど入れて回り、鎮火している皿に灯芯を足すなどして点火を続けた。常時10人ほどが作業に従事した。

灯明皿の回収　燃焼の観察および回収の対象とした灯明皿は、境内のもっとも奥の場所にある100点とした。ここは、人々があまり立ち入らない場所にあたる。なお、回収の際は１列に並べたものを回収し、それ以上のものは、後で参拝者が置いた可能性があり、器の使用時間が明確とならないため除外した。また、通路の曲がり角に置いたものは、参拝者の通行の際に破損したものも見受けられたため除外した。

３．平城京二条大路南濠状遺構ＳＤ 5100 の灯明皿等

類例調査として平城京二条大路南濠状遺構ＳＤ5100の灯明皿を観察した。

ＳＤ5100は、長屋王邸の後に設置された皇后宮職に関わる遺構とされており、平城宮編年Ⅲ段階の基準資料でもある。今回は灯明皿としての遺物の観察に終始した。ＳＤ5100の資料は、奈良時代の儀式に使用された馬場南遺跡の5,000点以上に及ぶ口径11～12cmの小形灯明皿に比べると法量が大きく、杯・皿以外に盤も使用されていた。観察の結果、灯明皿の煤などが付着した痕跡には３種あることがわかってきた。３種とは「油煙痕」「灯芯痕」「着火痕」である。この違いについては、元興寺資料を検討することでより確実なものとなった。

４．元興寺地蔵会資料の検討

８月の燃焼作業で得られた成果は以下のとおりである。

１)灯明に使った皿の口縁端部は黒色に変化する。しかし、その変化は単一ではなく、数種類に分けられる。

２)灯明皿の外形は古代から近代までほとんど変化しない。油の量と灯芯との関係、また、灯芯を口縁端部の外側に引き出すことを想定すれば、この形が火を安定的に燃焼できる形であったと考えられる。

３)灯明皿は複数列並べての使用には向かない。２列または３列配置した場所での点火は、火が乱立するため着火しにくいからである。また、衣服や周辺の草に火が燃え移る危険性もある。(注4)

元興寺で回収した灯明皿の観察にあたっては、個体ごとの写真撮影と略式図化を行った。また、洗浄を一部実験的に行った。

観察の結果、灯明皿の煤付着痕跡には３種あることが明らかになった。第１は「油煙痕」である(写真４・５)。口縁端部の内外面に横方向(口縁部に平行)に１～３cm、あるいは４～８cm、縦方向(口縁部に直交)に１cm前後(いずれも真上からみた場合)の範囲に黒色の範囲が円弧状に

認められる。これは、灯芯があった位置に連動しており、明らかに油煙によるものである。

第２は「灯芯痕」である（写真６）。口縁部内面のみ認められる。灯芯はその端だけが燃焼しているのだが、口縁部に密着している燃焼していないイグサの箇所のみが油煙を被らずに、土器本来の色が残り、その周辺が黒色に変化（油煙痕）しているものである。今回は３～６本のイグサを一度に使用したため、灯芯痕の幅は３～５mmであった。

第３は「着火痕」である（写真７）。口縁部外面に通常の油煙痕より広い範囲が黒色に変化したものである。これは、着火した際に時間がかかり、ろうそくの火が長く皿の外面にあたったため、黒く変色したものである。黒褐色の部分もある。なお、奈良時代の馬場南遺跡では着火棒が出土しており、この場合の着火痕を検討する必要がある。

この他に、皿の外底面が明るく、それ以外の体部が暗色に変化したものがある。明るいのは皿を地面に置いた際、接地した部分のみ変色していないことを示している（非油煙部）。暗いのは灯芯の火から発生した油煙が漂い皿の表面にかかったことにより、暗色に変化したもの（薄油煙部）と判断できる。皿の内面も変色しているものが認められる。これは、皿に入れた油が燃焼することによって、少しずつ漂った油煙がかかる範囲が広がることによる。今回の実験では、新たに油を継ぎ足したことが多く、外底面ほど変色した痕跡がはっきりしないものが多い。

なお、皿を置いた場所が風通しの良い場合、油煙痕が風紋のように縞状に残るものがある（縞状油煙痕）（写真８）。

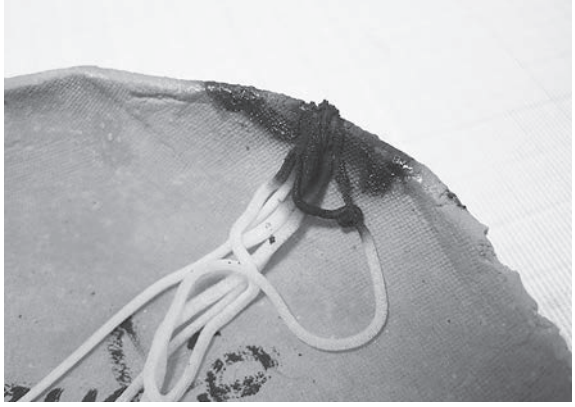


写真４　皿内面の油煙痕

写真５　皿外面の油煙痕

写真６　皿内面の灯芯痕

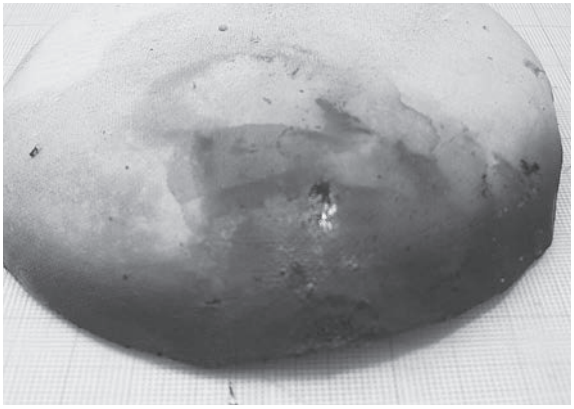


写真７　皿外面の着火痕

以上の痕跡点数をまとめたのが表１である。100点の皿の内、痕跡が明瞭な92点を観察し、集計した。内面の油煙痕は１か所が39点、２か所が35点、３か所が16点、４か所が２点であった。油煙痕が３か所の資料３点を観察したところ、油煙痕の範囲は表２のとおりであった（いずれも写真から測定）。油煙痕の範囲は、３点とも広いもの（3.1～4.6cm）２か所と狭いもの（0.7～2.2cm）１か所という組み合わせであった。これは数時間燃焼した２回と、夕立により１時間以内に消えた１回の事実と対応していると考えられる。また、油煙痕が１か所の資料６点を計測したところ、油煙痕の範囲は横４～７cm、縦0.5～2.7cmであった。３か所の場合、広いものが３～４cmであったのに対して、１か所の場合の広さは1.5倍から２倍ある。これらの皿は２回灯明に使用したことが明白なので、１か所と認識したものは、ほぼ同じ箇所に灯芯を置いて燃焼させたため、２回の燃焼の区別ができなかったといえよう。このことから灯明皿の油煙痕の箇所数は燃焼回数の下限を示すだけで、上限については慎重な検討が必要なことがわかった。皿の内面と外面の油煙痕を対比すると、１か所が39：48、２か所が35：34、３か所が15：３、４か所が３：２、５か所はなし、６か所が１：０となり、ほぼ対応している。このことから１つの灯芯を燃焼した場合、内外面とも油煙痕が認められることが判明した。

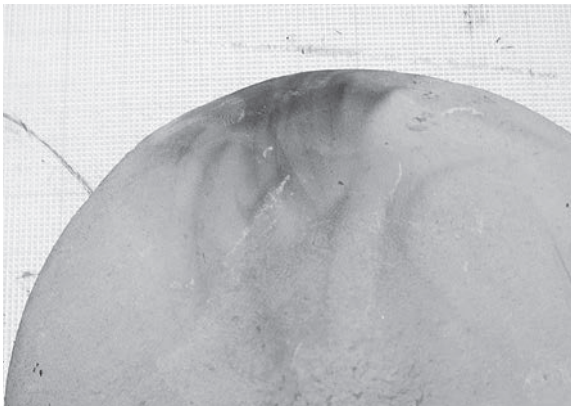


写真８　縞状の油煙痕

表１　灯明皿の灯火痕跡数

油煙痕（皿内面）						
箇所数	1	2	3	4		
点数 92	39	35	16	2		
灯芯痕（皿内面）						
箇所数	1	2	3	4	5	6
点数 67	25	23	15	3	0	1
油煙痕（皿外面）						
箇所数	1	2	3	4		
点数 87	48	34	3	2		
着火痕（皿外面）						
箇所数	1	2				
点数 19	18	1				

表２　油煙痕の範囲（cm）

資料番号	横	縦
1	3.2	0.3
	2.2	0.5
	3.1	0.7
2	4.6	0.4
	0.7	0.2
	3.6	0.4
3	4.5	0.5
	0.8	0.2
	2.2	0.5

灯芯痕は67点で判別できた。資料の73％である。１か所が25点、２か所が23点、３か所が15点である。これで判別できたうちの94％を占める。最大は６か所である。この痕跡は灯芯が長時間動かず燃焼した場合にできるもので、すべての資料で必然的に認められるものではない。灯芯の幅や、本数を検討する際に必要なデータである。

着火痕については、実験で判明した事実である。広範囲に黒く変色したもので、火がつきにくい場合や何度も消えた場合に残るものである。この痕跡は19点（21％）で認められた。１か所が18点、２か所が１点である。着火時の風などの自然環境を復元する際に参考となる。

なお、今回、非油煙部、薄油煙部と分類した変色箇所については、別の見解がある。灯火器が多量に出土した平城京二条大路南濠状遺構ＳＤ5100の整理作業中に、その痕跡が消失し易いために行なわれた実験によると、「使用前の素焼きの皿は明るい灰黄色を呈していたが、灯火を灯すと色合いが大きく変化した。内面の油が浸み込んだ部分は、全体に暗灰色に変色し、部分的に赤橙色の発色が現れる。そして外面の油の浸み込んだ部分は、内面より明るい色合いの黄土色に変

色し、明るい赤橙色のドーナツ状のリングの斑文が現れた。リング外周縁部は、淡い鮮やかなピンクを呈する。[注5]」という。すなわち、油の浸み込みと灯火の熱によって変色すると観察したのである。

確かに、油が浸み込んだ部分は変色する。写真１や写真２のように、乾いた皿は油を入れることで、褐色に変色する。これ以降の変色を油煙によると考えるか、油の浸み込みと灯火の熱によると考えるか、判断が分かれる。あるいは、その両方であるかもしれない。この区別については、今後、痕跡を詳細に検討したい。

８．まとめ

今回の成果は、大量の灯明皿の観察により、灯火に関係する痕跡は「油煙痕」「灯芯痕」「着火痕」とに分けられることが明らかになったことである。灯明皿として断定するためには、「油煙痕」があることが絶対条件である。油煙痕については、２時間以内に鎮火したものは0.7～2.2cm、１回の儀式では油を補充しなければ、３時間程度で鎮火するが、この場合は３～４cmの範囲に痕跡が残ることが確認できた。かつて行われた儀式で、灯明皿が一夜、１回限りで捨てられたのか、そうでないのかという判定をする際に、目安となるだろう。「灯芯痕」は、灯芯が動かずに燃焼した場合に残るもので、燃焼時の自然環境を考えるうえで参考になる。「着火痕」は着火時の自然環境を復元する際に、参考になる。

今回は、儀式で使用された灯明皿の痕跡を中心に検討を進めてきた。今後は日常の灯火器との比較をし、その相違を明確にすることが課題と考える。

（まきた・りつこ＝元調査研究センター調査課調査第１係調査員）
（いの・ちかとみ＝当調査研究センター調査課調査第２係次席総括調査員）

【謝辞】
今回の共同研究に際し、元興寺・元興寺文化財研究所および奈良文化財研究所の方々にお世話になりました。記して感謝を申し上げます。

注１　巽淳一郎ほか「考察Ⅴ　３Ｃ　SD5100木屑層の土器組成の特質」（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告　長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良文化財研究所学報　第54冊　奈良国立文化財研究所）　1995
牧田梨津子「あかりをつけましょ―灯火器の実証実験―（上）（下）」（『京都府埋蔵文化財情報』第117・118号　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2012

注２　『続日本紀』天平16(744)年12月８日条「この夜、金鐘寺と朱雀路とに燈火一万坏を燈す」、天平18(746)年10月６日条「（聖武）天皇と（元正）太上天皇と（光明）皇后と、金鐘寺に行幸したまひて、盧遮那仏を燃燈供養したまふ。仏の前後の燈火一万五千七百餘坏。」などの例がある。

注３　伊野近富ほか「（１）馬場南遺跡第２次」（『京都府遺跡調査報告集』　第138冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2010

注４　注２で紹介したように多数の灯明皿を使用する場所は、朱雀路や（大）仏の前後といった空閑地が選ばれている。

注５　注１巽報告による。

7.大川（おおかわ）遺跡第４次

所 在 地　舞鶴市字大川地先

調査期間　平成25年４月27日～平成26年３月６日

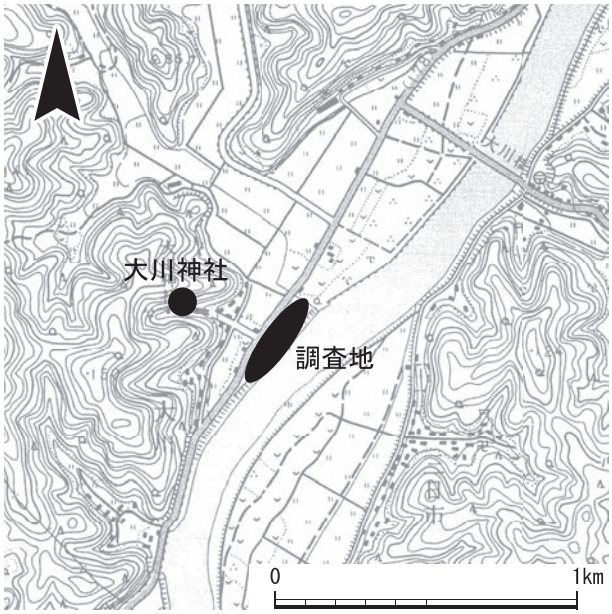
調査面積　5,000㎡

はじめに　今回の発掘調査は、由良川下流部緊急水防災対策事業に関わる堤防工事に伴い、国土交通省福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、河口から約8.5km遡った由良川左岸に位置する。調査地西側山裾には式内社である大川神社が鎮座する。これまでの調査で、室町時代～江戸時代の掘立柱建物や南北朝～室町時代の礎石建物、平安時代後期～鎌倉時代初期の掘立柱建物、古墳時代の溝、弥生時代の遺物包含層が検出され、弥生時代から近世まで続く大規模な複合遺跡であることが確認されている。

調査概要　今回の調査は築堤範囲内にＡ～Ｃの３地区を設定して行った。室町時代と平安時代後期～鎌倉時代初期、弥生時代～古墳時代後期の遺構面を確認した。上層より第１面・第２面・第３面とし、以下に各トレンチの概要を述べる。

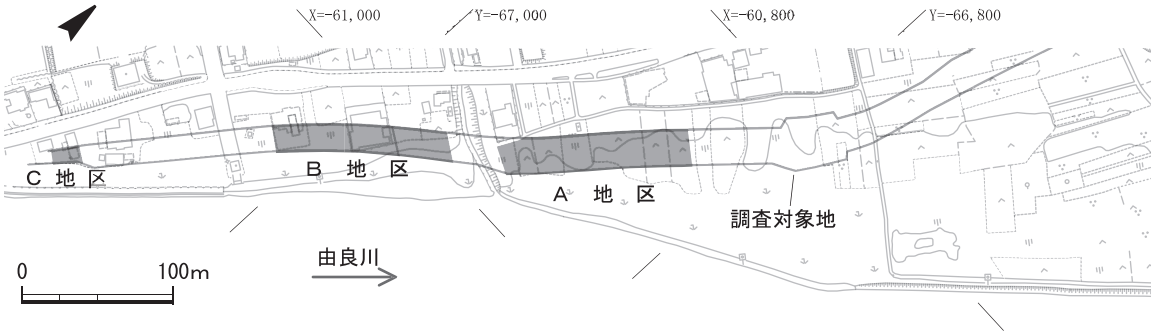
Ａ地区　第１面で石組み遺構・杭跡を検出した。石組み遺構は一辺約１ｍの方形で、北西と南西の２面では面を揃えて人頭大の石が置かれていた。石塔の基礎と考えられる。室町時代の遺物包含層から棹秤のおもりが出土した。

第２面で鍛冶炉・掘立柱建物・井戸・土坑を検出した。鍛冶炉は直径約30cmの円形で、地面を掘り窪めて作った簡単なものである。周辺の土壌中から鍛造剥片を採集した。掘立柱建物および柱穴群は鍛冶炉周辺で集中して検出した。層位から鍛冶炉よりやや時期が下るようである。建物に近接した土坑からは完形品を含め、約30点の土師器皿や黒色土器がまとまって出土した。祭祀に関わるものとみられる。井戸は、丸木舟を半裁し組み合わせて、井戸枠として転用したものである。第３面で遺構は確認できなかった。



第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　西舞鶴）

Ｂ地区　第１面で石組み遺構・杭跡を検出した。石組み遺構は一辺１ｍの方形で、



第２図　トレンチ配置図

建物１（西から）

Ａ地区で検出したものと同様である。杭跡は直径10～15cmを測り、調査地区全体で多数検出された。うちいくつかは等間隔に並んでおり、柵と判断できる箇所もある。

第２面で掘立柱建物７棟・柵２条・井戸４基を検出した。建物１は、南北３間（9.1m）×東西３間（7.6m）の総柱建物で、建物の主軸は北から29°東に振れる。その北側で柵２条を検出した。その他の建物の主軸も北から30°～40°東に振れており、由良川の流路の方向に平行して建てられたとみられる。

第３面では竪穴建物状の落ち込みを多数検出した。弥生時代と考えられる円形のものと古墳時代後期と考えられる方形のものとがある。方形のものは一辺約６ｍ、円形のものは直径約８～10ｍの規模である。

Ｃ地区　第１面で杭跡・柵を検出した。柵は２条確認でき、いずれも由良川の流路方向に直交する。

第２面で柱穴・土坑を検出した。柱穴は建物として復元することができなかった。包含層から宋銭33枚と高麗象嵌青磁が出土した。なお、Ｃ地区では第３面以前の遺構面は確認できなかった。

まとめ　今回の調査で、弥生時代～室町時代にかけての自然堤防上の集落の様相が明らかになってきた。古墳時代後期～鎌倉時代初期はＢ地区を中心として居住域が広がっていたようである。室町時代になると、杭跡が中心で建物を確認できなかったため、居住域が移動したと考えられる。掘立柱建物・柵・竪穴建物の主軸は、ほとんどが由良川に平行、もしくは直交する方向を向いている。その状況は、現在の町並みと等しく、由良川に平行する街道に沿って集落が形成されていたとみられる。遺物は、土師器を中心に黒色土器や瓦器・土錘などが出土した。中国製青磁・白磁が百数十点出土したほか、朝鮮半島の象嵌青磁や青磁、滑石製石鍋、東播系の須恵器などが出土しており、他地域との交流が盛んであったことが窺える。（綾部侑真）

8.出雲（いずも）遺跡第16次

所 在 地　亀岡市千歳町千歳地内

調査期間　平成25年７月５日～10月16日

調査面積　1,000㎡

はじめに　出雲遺跡は、亀岡盆地東部の三郎ヶ岳（標高614m）の麓に所在する遺跡である。東西約0.5km、南北約1.7kmの大規模な遺跡範囲をもつ。調査地の西には、古墳時代後期の丹波最大の前方後円墳である千歳車塚古墳（墳丘長約80m）や石製腕飾が出土した古墳時代前期の出雲武式古墳（円墳、墳丘径約19m）が位置する。また、東には平安時代の大社であり、丹波国の一宮とされる出雲大神宮が所在する。出雲遺跡の過去の発掘調査では、古墳時代前期から中期の竪穴建物や平安時代末期の礎石建物などが見つかっている。今回の調査は、農山漁村活性化プロジェクト支援交付金千歳地区の整備事業に先立ち実施した。

調査の概要　調査地は、出雲遺跡の北部に位置し、山麓部の緩やかな傾斜地に立地する。調査地周辺は、耕作地が広がり、調査対象地はかつては棚田として利用されていたものである。発掘調査は、南北２か所の調査区を設定して実施し、北部の調査区を１区とし、南部の調査区を２区とした。調査面積は、１区は720㎡を測り、２区は280㎡を測る。

①１区の調査　１区は棚田として利用された旧地形がよく残り、南から北へ階段状に下がる３段のテラス面で各時代の遺構を検出した。おもな検出遺構は、弥生時代の土坑１基、古墳時代の竪穴建物１棟と土坑１基、平安時代とみられる掘立柱建物１棟、平安時代の溝１条である。

弥生時代の遺構　調査区北部で弥生時代の土坑１基（土坑７）を検出した。土坑７は、復元径約２～３m、深さ0.3mの浅い半円状の土坑である。土坑内から弥生土器の甕や器台が出土しており、時期は弥生時代後期後葉（２世紀後半）と推定される。また、遺構は確認していないが、包含層中からは弥生時代中期の土器や粘板岩製の石包丁が出土している。

古墳時代の遺構　調査区北部で竪穴建物１棟（竪穴建物１）と土坑１基（土坑10）を検出した。竪穴建物１は、方形の建物跡で、一辺約4.3mの規模をもつ。床面で４本の主柱穴や、土坑を確認した。出土した土器から、古墳時代前期末～中期初頭（４世紀末～５世紀前葉）の建物であることが判明した。土坑

第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　亀岡）

10は、径約0.7m、深さ0.2mの円形の土坑である。土坑内から土師器甕が出土し、時期は古墳時代前期前葉と推定される。

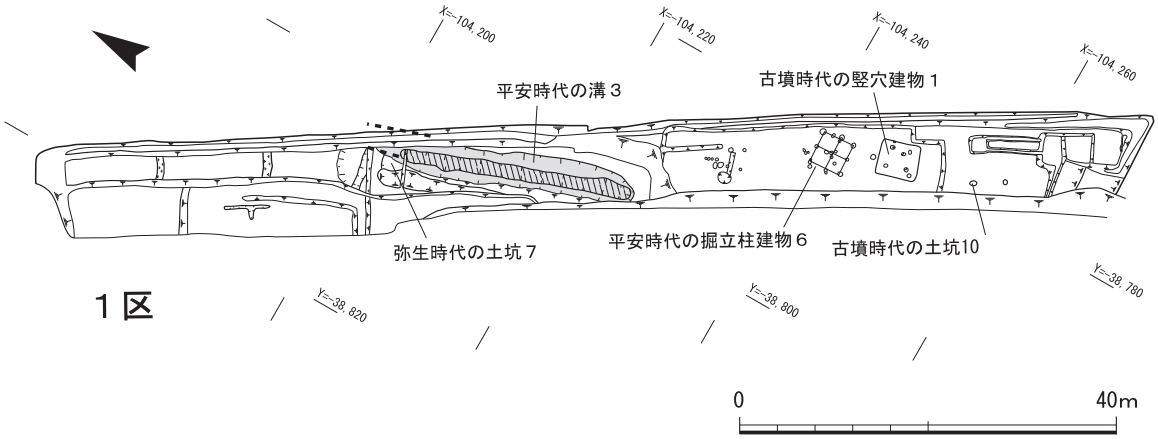
平安時代の遺構　調査区南部で掘立柱建物１棟（掘立柱建物６）を検出し、北部で溝１条（溝３）を検出した。掘立柱建物６は、柱間が２間の総柱の建物で、柱間は1.5～1.8mを測る。柱穴から出土した土器から、平安時代前期（９世紀）の建物と推定される。北部で確認した溝３は、南北の長さ約23mにわたって検出したもので、北側は調査区外にさらに延びる。溝の規模は、幅約3.5m、深さ約0.4mを測る。溝の上部は大きく削平されており、本来はさらに幅が広く深い溝であったと推定される。溝の堆積状況から、掘削当初は水を湛えていたと考えられる。溝内から、土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器などの多量の土器や桃核などが出土している。また、土師器皿や瓦器椀などは完形に近い状態でまとまって出土している地点があり、こうした土器群は儀礼や祭事に使われた食器類が廃棄された可能性がある。出土した土器から、平安時代末期（12世紀後半）の溝と推定される。

②２区の調査　２区では、浅い不整形の土坑を検出した。長さ約2.5m、幅1.5m、深さ0.15mの規模をもつ。基底部が平坦で一部被熱した部分が認められることから、竪穴建物の残欠の可能性がある。土坑内から高杯や甕が出土し、時期は古墳時代中期前半（５世紀前半）と推定される。

まとめ　今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代前期～中期、さらに平安時代の建物や土坑、溝などを確認し、眺望の良い丘陵斜面に各時代の集落が広がることが判明した。特に注目される遺構は、南北に直線的に掘削された平安時代末期の溝３であり、調査地東側に想定される居住域を区画する溝の可能性がある。溝からは多量の土器が出土したが、これらには青白磁の合子や皿、白磁椀、青磁皿などの多くの中国製陶磁器類が含まれており、周辺に有力者の館が存在する可能性がある。

（高野陽子）

１区　平安時代の溝３（南東から）



第２図　１区平面図

9.長岡京跡右京第1067次（7ANKSM-18地区）・開田遺跡・開田古墳群

所 在 地　長岡京市開田２丁目

調査期間　平成25年７月22日～10月30日

調査面積　420㎡

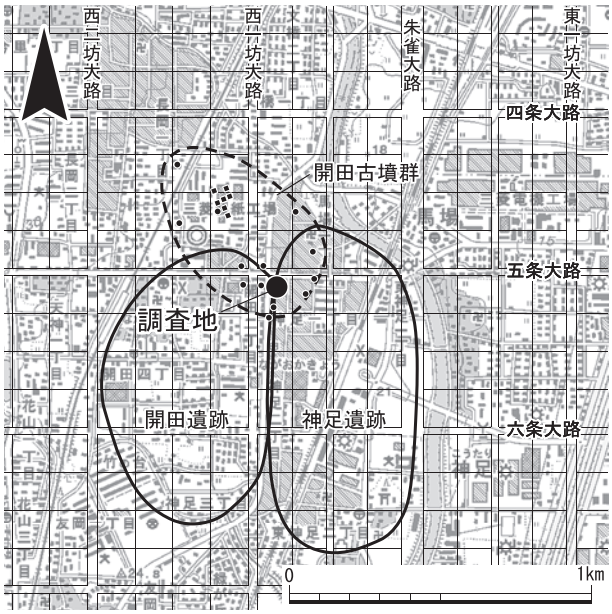
はじめに　今回の調査は、平成25年度御陵山崎線防災・安全交付金（街路）業務に伴って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京跡右京六条一坊十六町（新条坊）にあたる。また、旧石器時代から近世にかけての集落遺跡である開田遺跡や、古墳時代中期から後期にかけての古墳群である開田古墳群の範囲内に位置している。

調査概要　調査は、対象地内に３か所のトレンチを設定して実施した。その結果、古墳時代から近世にかけての遺構を検出した。古墳時代の遺構としては、方墳の周溝となる溝を検出した。一辺7.5m前後の小規模な方墳であるが、周溝内からは５世紀に比定される遺物が出土しており、古墳時代中期の古墳と考えられる。溝の埋土から初期須恵器の甕片が出土した。また、溝底からは土師器壺、底部を削り朝鮮半島の影響を受けた平底鉢が出土した。埋葬施設は、後世の削平のため、残存していなかった。長岡京期の遺構としては、布目瓦が出土した土坑を検出したが、その性格は不明である。その他、中世の溝や近世の土坑などを検出した。

まとめ　調査地は、長岡京の五条大路と西一坊大路の交差点南東側に相当する地点であるが、顕著な長岡京期の遺構は残存していなかった。

また、調査地周辺では、削平された古墳群が確認されており、開田古墳群として認識されている。調査地付近に分布する古墳は、この古墳群の東羅支群として捉えられている。東羅支群では、これまでの調査で13基の古墳が確認されている。今回の調査で、さらに１基の古墳を追加することになり、東羅支群13号墳と命名されることとなった。これが今回の調査の大きな成果といえる。また、韓式系遺物の出土が注目される。　（引原茂治）



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　京都西南部）

10.下水主遺跡第４次（Ｇ地区）・水主神社東遺跡第５次（Ａ－３・Ｂ－３地区）

所 在 地　下水主遺跡第４次（Ｇ地区）：城陽市寺田字今橋
水主神社東遺跡第５次（Ａ－３・Ｂ－３地区）：城陽市寺田字金尾

調査期間　下水主遺跡第４次（Ｇ地区）：平成25年９月10日～11月14日
水主神社東遺跡第５次（Ａ－３・Ｂ－３地区）：平成25年10月１日～平成26年１月17日

調査面積　下水主遺跡第４次（Ｇ地区）：1,290㎡
水主神社東遺跡第５次（Ａ－３・Ｂ－３地区）：3,100㎡

はじめに　この調査は、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて、平成23年度から継続して実施している。上記調査区は、各調査次数対象地の一画にあたり、平成25年度下半期に調査した。下水主遺跡は、東西500m、南北800mを測る遺物散布地で、調査地はその北東部の国道24号線沿いにある。水主神社東遺跡は、東西450m、南北450mの遺物散布地で、調査地はその西部にある。この両地点周辺部の調査により、中世以降連綿と島畑が造られてきたこと、中世以前の遺構としては、弥生時代から平安時代にかけての遺構が部分的に確認できるなどの成果を得ている。

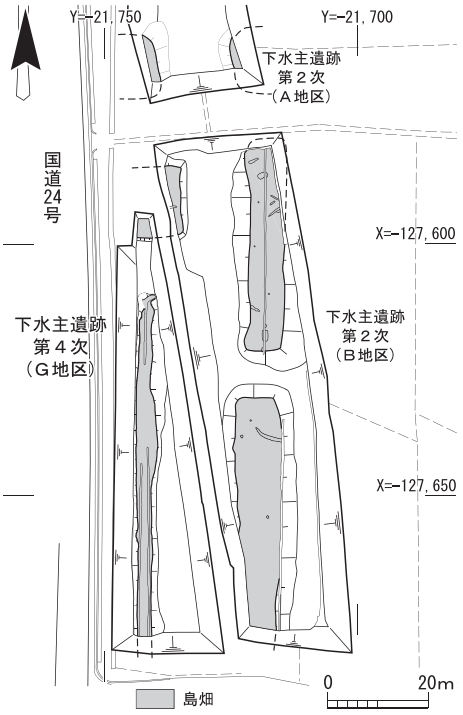
調査概要

①下水主遺跡第４次（Ｇ地区）　調査地は、平成24年度に調査した下水主遺跡第２次（Ｂ地区）と国道24号線の間である。検出遺構は、島畑２か所と島畑に伴う耕作溝、下層から溝を検出した。島畑については明確に時期を示す土器がなく、周辺の島畑の検出状況などから13世紀代と考えた。南北方向の島畑は、幅約５m、検出長約72mを測る。上面に耕作溝３条が掘り込まれる。北側で検出した島畑は、第２次（Ｂ地区）の北西隅の島畑の続きで東西方向である。南北方向の島畑北端では、島畑上面から約20cm下で溝１条を検出した。幅約0.8m、深さ約0.2m、検出長3.0mである。埋土中から弥生時代後期の壺が出土した。調査範囲が狭く、溝の性格については不明である。

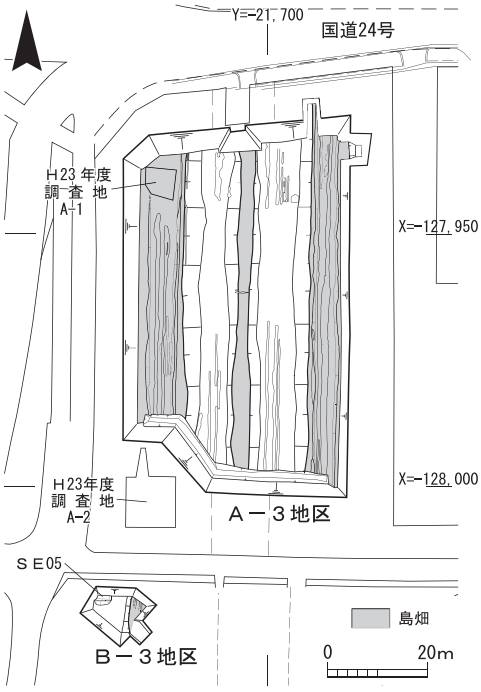
第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　宇治）

② 水主神社東遺跡第５次（Ａ－３地区）

平成23年度の調査（Ａ－１・２地区）において瓦器の細片を包含する溝を検出したことから、その調査成果を踏まえて面的な調査を実施した。調査の結果、南北方向の島畑３条を検出した。島畑からは明確な時期

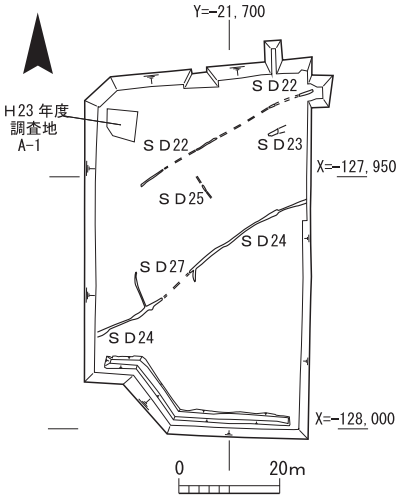


第２図　下水主遺跡第４次（Ｇ地区）遺構図



第３図　水主神社東遺跡第５次（Ａ－３地区）遺構図上層

を示す土器が出土せず、周辺の島畑の検出状況などから13世紀代と考えた。面的調査の結果、平成23年度調査のＡ－１・２地区で確認した溝は、13世紀以降の島畑から掘り込まれたものと判明した。また、調査地南側では島畑上面から約20cm下に下層の遺構面が認められた。下層では、調査地を斜行する形で溝２条（ＳＤ22・24）と、それに直交する溝（ＳＤ25・27）を部分的に検出した。ＳＤ22・24は、幅20～50cm、深さ20～40cm、方位はＮ55°Ｅである。埋土中から弥生時代末から古墳時代初頭の土器片が出土したことから、その時期の溝と考えられる。遺構面は、南ほど低くなる。



第４図　水主神社東遺跡第５次（Ａ－３地区）遺構図下層

③水主神社東遺跡第５次（Ｂ－３地区）　第５次（Ａ－３地区）の南側に設定した調査区である。13世紀代の島畑の一部と、その後の埋土を掘り込む素掘りの井戸ＳＥ05を検出した。ＳＥ05は調査区北西隅で一部確認しており、全体形は不明である。検出した規模は、一辺3.5m以上、深さ2.2mを測る。土師器片と瓦器片が出土した。細片であるため時期は特定できないが、おおむね中世と考える。

まとめ　この調査地付近は、中世に島畑の造成が行われ、中世以前の遺構面を大きく削平していた。そのため、下層遺構については部分的な検出となった。水主神社東遺跡第５次（Ａ－３地区）下層から検出した溝については、周辺部で竪穴建物等の検出例がなく、その性格は明らかでないが、耕作に伴う溝の可能性がある。

（岡﨑研一）

11.長岡京跡左京第565次（7ANYSK-2・YHD-2地区）・下津城跡

所 在 地　京都市伏見区淀大下津町（洛西浄化センター内）

調査期間　平成25年10月16日～平成26年２月14日

調査面積　1200㎡（500㎡）

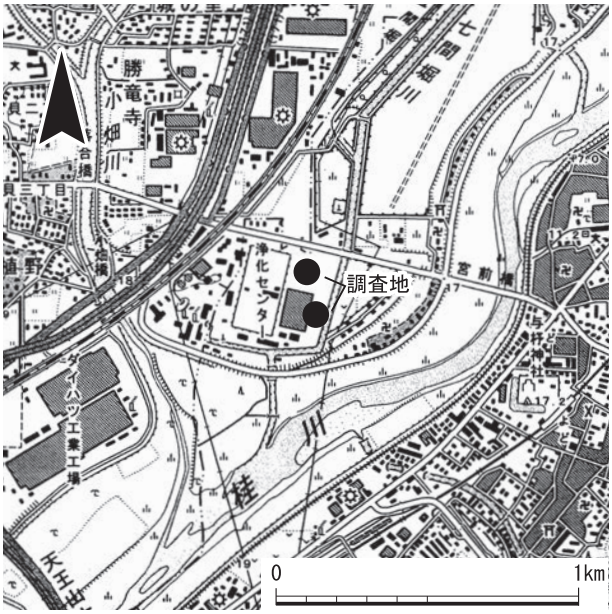
はじめに　この調査は、桂川右岸下水道幹線暗渠工事（雨水南幹線）に伴い、京都府下水道事務所の依頼を受けて実施したものである。

調査対象地は、長岡京条坊復原案（新条坊）では右京九条二坊三・四町にあたる。また、中世末期の下津氏の居城である下津城跡が推定されている地域でもある。

洛西浄化センター内では、これまで２回の調査が実施されている。右京第527次調査では盛土・整地層の下、標高10m付近で、耕作土・床土とその下層で溝が検出されている。右京第547次調査でも盛土・整地層の下、標高10m付近で、耕作土・床土があり、その下に有機物包含層、植物の根株痕跡が確認されている。それらの下には一部で砂を含む粘質土がみられるが、おおむね粘質土が厚く堆積する。

調査概要　右京第527次調査地の北側に２トレンチ、右京第547次調査地の東側に１トレンチ、合計２か所のトレンチを設定した。

１トレンチは東西30m、南北62mで、整地層を重機で除去した後慎重に掘削したが、砂質土・粘質土の水平堆積および円形～長円形の窪みに砂・砂質土が堆積した状況が観察できたのみで、顕著な遺構はなかった。その下層を確認するため中央部を掘り下げたところ、想定された遺構面よりも1.5m低い標高6.8m前後で南北方向の溝状痕跡を検出した。溝状痕跡はほぼ直線的に延びるが、途中で二股に分かれるもの、途中で消滅するものがあり、溝の東西間隔も粗密がある。地質の詳細な観察から、これらの溝状痕跡は人工的なものではなく、沼沢地の表面を急激に水流が渦巻きながら流れた際に、抉り取られた窪みに別の土が堆積したものと推測された。溝状痕跡からは土師器や瓦器の小片が出土した。同様の土師器や瓦器がベース面からも出土している。標高6.2m付近で子供の爪程度の土師器片を採集したが、６m以下では土器は出土



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　淀）

していない。

２トレンチは東西19.5m、南北80mで、盛土・整地層と想定される部分を重機で除去した後、慎重に掘削を進めた。南東端に耕作土・床土がわずかに残っていたが、その下に第527次調査で検出した溝はなかった。西側の既存建物側は標高８m以下まで整地層がおよんでおり、遺構は確認できなかった。東側の断面観察では、南部では砂・砂質土が厚く堆積するが、北部では砂・砂質土がみられず粘質土が堆積する。南部～中央で断ち割りを実施し、標高７m付近で土師器が出土したが小片であったため時期は不明である。

写真１　１トレンチ全景（南から）

写真２　１トレンチ西壁（東から）

写真３　２トレンチ全景（南から）

まとめ　今回の調査では長岡京跡、下津城跡に関連した遺構・遺物ともに検出できなかったが、土砂の堆積状況から付近の自然環境が分かる資料を得た。１トレンチ下層の標高6.8m付近で検出した溝状痕跡は耕作に関連したものではなく、沼沢地の表面を抉った痕跡と推定された。溝状痕跡とベース面から出土した土師器、瓦器、瓦質土器などの土器類はいずれも14世紀代のものである。ベース面から輸入銭である「景徳元寶」（初鋳1004年）や平瓦片、桃の種子が出土した。これらの遺物は小片で、周辺から流入したものと考えられる。

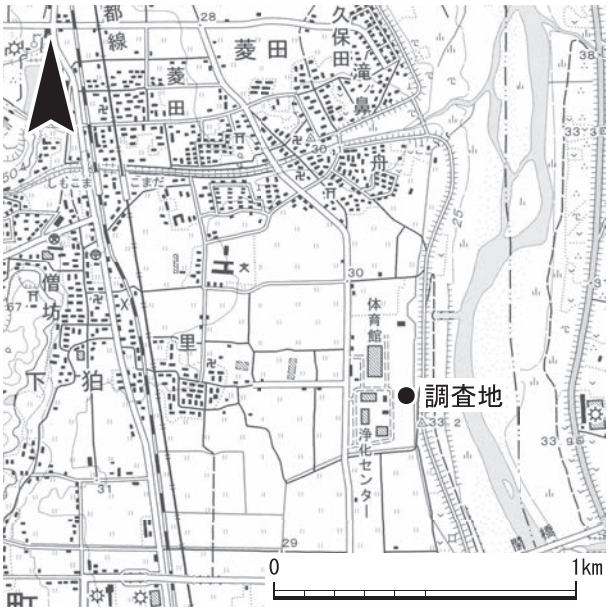
１トレンチの断面観察と下層の断ち割りから推定される付近の状況は、標高3.5m以下に砂礫層があり、河川堆積と推測された。標高５mまで約1.5m程度黒色粘質土・粘土が堆積する。標高5.2mに有機質（植物繊維）を含んだ黒色粘質土が堆積する。その上にはさらに粘質土が厚く堆積している。溝状痕跡とベース面では中世の土器が出土した。土器類は標高6.8m付近に多く堆積していることがわかった。それより上層には土器類はほとんどなかった。また、溝状痕跡より上層の粘質土の水平堆積が褶曲した部分の下に砂の堆積が幾度か重なっているのが観察できた。これは地震で揺り動かされたとき、上面にあった砂質土などの砂が底面に集積されたものと推測された。粘質土の堆積が厚く噴砂は確認していない。上記のように、この付近が西の小畑川、東の桂川に挟まれた遊水池であった期間に大量の粘質土などが繰り返し堆積したことがわかる貴重な調査成果があった。（石尾政信）

12.椋ノ木遺跡第11次

所 在 地　相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木ほか
調査期間　平成25年11月７日～平成26年３月４日
調査面積　620㎡

はじめに　椋ノ木遺跡は、木津川左岸に形成された自然堤防および後背湿地に立地する集落遺跡である。平成７年度から23年度にかけて、木津川上流浄化センター施設建設に伴いこれまでに10回にわたる調査を実施している。その結果、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前・中期の竪穴建物、後期の古墳、平安時代末から鎌倉時代の建物などのほか、１町（約109ｍ）を基準とした条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝などを検出し、縄文時代から中世まで複数の時期に営まれた集落遺跡であることが判明している。

調査概要　今回の調査では、平安時代後半から鎌倉時代、古墳時代、縄文時代の遺構面を確認した。第１面は現地表面より約３ｍの深さ（標高約25.5ｍ）で確認し、平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物２棟や柵１条、土坑、礫敷きなどの遺構を検出した。掘立柱建物のうち、１棟は南北３間（7.2ｍ）×東西５間（11.7ｍ）の東西方向の大型建物で、東西に廂をもっており、南には建物と平行する柵が設けられている。もう１棟は南北１間（３ｍ）×東西２間（5.2ｍ）の東西方向の建物で、部分的に柱穴内に平らな礫を据えて礎盤として用いている。礫敷き遺構は５～20cmの礫を東西約２ｍ、南北約3.4ｍの範囲で検出した。遺物は土師器皿や瓦器椀、鉄滓、古銭などが出土した。また、古墳時代となる第２面では、遺構の密度は希薄であるが円形や不定形６な土坑を検出した。第３面では、縄文時代晩期の土器片や石鏃が出土した。

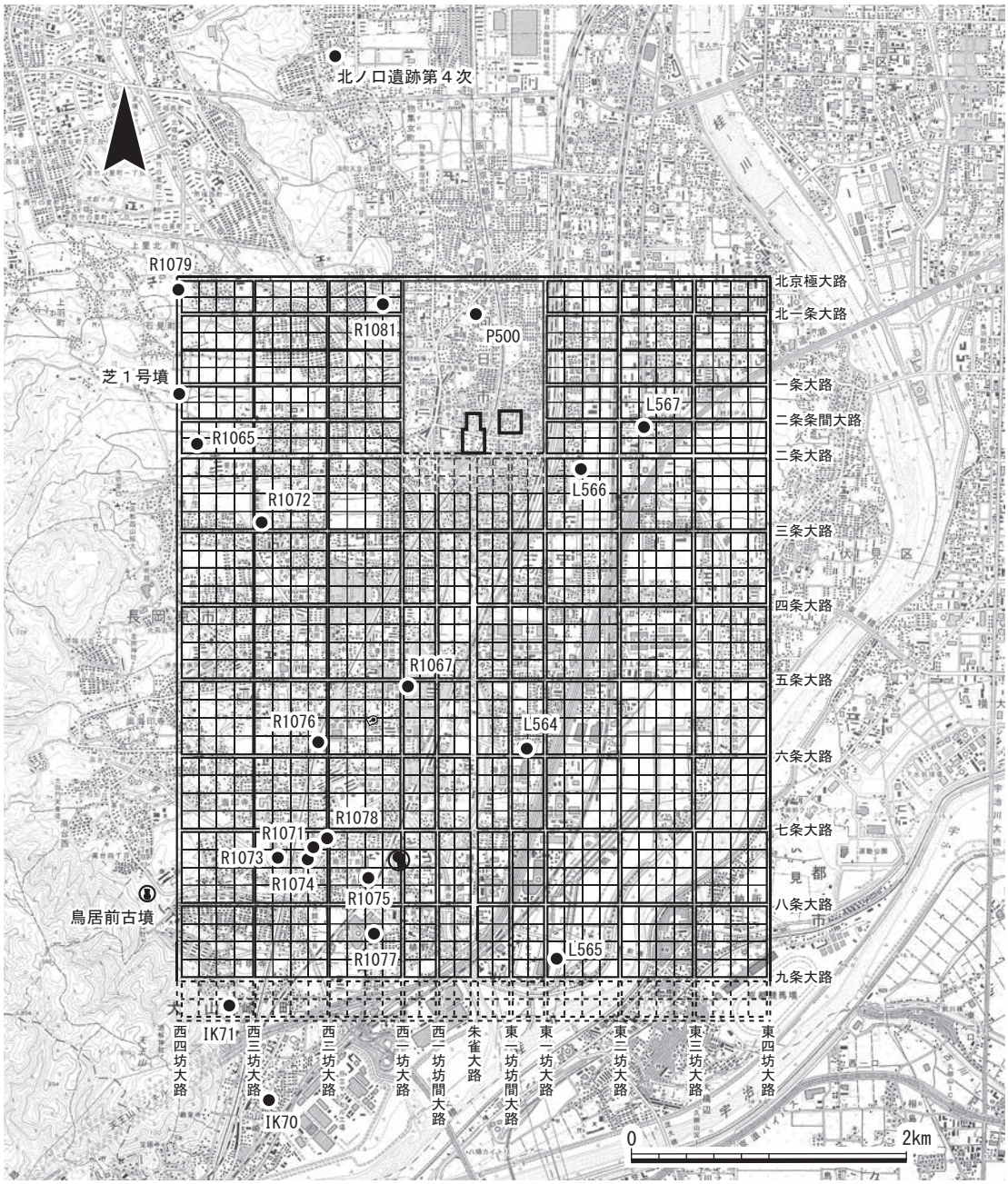


第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　田辺）

まとめ　今回の調査では、条里に関連する遺構は確認できなかったが、鎌倉時代前葉と思われる大型の掘立柱建物などを検出した。建物の方位は第６・９次調査で検出した大型の掘立柱建物と同じであり、条里区画に沿って建てられたことが窺える。また、今回の調査地と同じ条里区画内に位置する第８次調査では、鍛冶炉やフイゴ羽口・鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土しており、今回の調査地でも鉄滓が出土したことから、同区画内に鍛冶作業に関連する施設があった可能性も考えられる。　（村田和弘）

長岡京跡調査だより・119

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成25年11月から平成26年１月の例会では、宮域１件、右京域14件、左京域４件、京域外３件の合計22件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。



調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　第500次調査(向日市寺戸町)は調査地西半を東一坊坊間西小路が通過する位置にあたる。今回の調査では遺構は確認されなかったが、長岡京期の土師器・須恵器、縄文土器やサヌカイト剥片が出土した。

右京域　第1072次調査・今里遺跡(長岡京市今里)では中世の溝や土坑・掘立柱建物・ピット、奈良時代の掘立柱建物・溝・ピットなどが検出された。奈良時代の掘立柱建物群は調査地中央の東西方向の溝より南側に集中する。溝は宅地の区画溝にあたると考えられる。出土遺物は少ないが、おおむね奈良時代中頃を中心とすると考えられる。第1074次調査・友岡遺跡・鞆岡廃寺(長岡京市友岡)では後世の削平により遺構は確認できなかったが、土器のほか平安時代以前の瓦が多量に出土した。調査地は友岡遺跡の南西部に位置するとともに、古代寺院である鞆岡廃寺の推定域に含まれる。出土した軒瓦には鞆岡廃寺資料が多く認められる。周辺の調査では平安時代までの掘立柱建物や溝などが検出されており、今後の整理作業の成果が期待される。第1075次調査(長岡京市調子)では奈良時代の遺構が確認された。調査地周辺は、遺跡地図では長岡京跡しか周知されておらず、新たな成果となった。第1078次調査・伊賀寺遺跡(長岡京市下海印寺)では飛鳥～奈良時代の建物２棟や柱穴群、縄文時代後期の柱欠状掘り込みや土坑、縄文時代中期の溝や窪みが検出された。縄文時代後期の遺構が確認され、縄文時代中期の土器がまとまって出土したことから縄文時代中期～後期の集落の様相が明らかになってきた。次号で詳細を報告するが、第1073次調査・伊賀寺遺跡・鞆岡遺跡(長岡京市友岡西畑)でも縄文時代中期末の竪穴建物が確認されており、同時期の集落の立地や様相が明らかになってきている。

左京域　第564次調査・雲宮遺跡(長岡京市神足)では六条大路路面及び北側溝、東一坊坊間小路西側溝などが確認された。

六条大路路面及び北側溝からは長岡京期の遺物が多量に出土しており、円座や漆器など木製品が良好に残っていた。そのほか銭貨、墨書人面土器、土馬、獣骨など祭祀に関わる遺物が出土している。下層から縄文土器やサヌカイト片が出土している。

京域外　芝１号墳(京都市西京区)は「乙訓の首長墓群」史跡指定の候補の一つとして整備事業が計画されており、それに伴い地形測量が実施された。現在のところ、埴輪等の遺物は確認されていない。IK71次調査(大山崎町字円明寺)では御茶屋池の南東の谷部に調査区を設定した。中世のピットを検出したほか鎌倉時代の瓦が出土しており、御茶屋池の北西にあったと伝えられる円明寺山荘の庭園との関係が考えられる。　(松尾史子)

普及啓発事業（平成25年12月～平成26年３月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業（体験学習）等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第126回埋蔵文化財セミナー『速報！京都発掘～恭仁宮・長岡京・平安京外縁～』を平成26年３月８日（土）に長岡京市産業文化会館で実施しました。京都府教育庁指導部文化財保護課中居和志氏の「恭仁宮の構想を探る－最新の発掘調査から－」では、朝堂院域で検出された大型の建物の構造的特質が紹介され、その歴史的意義について考察が加えられました。公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター木村泰彦氏の「長岡京内の漆工房の調査－長岡京跡左京第557次調査を中心に－」では、六条大路と東一坊大路の交差点と北西に面する町内の調査成果から路面や側溝の特徴的な在り方や、周辺で出土した漆製品の出土の背景について「東市」の可能性も含めて検討されました。当調査研究センター高野陽子氏の「平安京北郊でみつかった居館－植物園北遺跡の発掘調査から－」では、植物園北遺跡における三面廂建物を中心に置いた平安時代の屋敷地の調査成果を報告し、都城に近接した地域における居館について考証しました。107名の参加者を得て盛況のうちに終了することができました。

第126回埋蔵文化財セミナー実施状況

現地説明会

椋ノ木遺跡第11次調査の成果について、平成26年１月19日（日）に現地説明会を実施しました。鎌倉時代前葉の柵を伴う廂付建物や礫敷き遺構などを目の前に、77名の見学者は酷寒の天候にも関わらず、担当者の説明に熱心に耳を傾けていました。

椋ノ木遺跡現地説明会

体験学習・遺跡見学等

平成25年12月７日（日）、京田辺市立松井ケ丘小学校の『ふるさと体験学習』として、松井横穴群・向山遺跡の発掘現場で現地見学会を開催しました。発掘調査の作業の流れとその重要性を説明し、往時の建物や墓の遺物について解説しました。引率者を含め38名が参加しました。

（伊賀高弘）

松井ケ丘小学校体験学習（松井横穴群）

「関西考古学の日」関連事業を振り返って

「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに加盟する13法人が、さまざまな連携事業を実施する企画である。「関西考古学の日」の取り組みは、平成20年度から実施しており、今年度で６年目を迎えている。当初は知名度も低く広く周知できなかったが、近年では各イベントの参加者も増加しており、広く周知され定着したという実感を各機関の担当者がもてるまでになった。

今年度、当調査研究センターでは、この取り組みにあわせて乙訓管内に所在する小学生を対象に夏季休業期間に考古学体験講座として「勾玉をつくろう」と「昔のお金をつくってみよう」を開催した。当初、昨年度の体験講座同様、30名程度の参加者を想定していたが、想定以上の反響があり、文末に示すように「勾玉をつくろう」が96名、「昔のお金をつくってみよう」が69名、合計165名の参加者を得ることができた。

「勾玉をつくろう」では、単に勾玉を製作するだけではなく、縄文時代から古墳時代にかけて勾玉に代表される装身具が有する歴史的意義について、短い講座を開くとともに、向日市文化資料館で当調査研究センターが開催している「小さな展覧会」で関連展示遺物を実見したうえで体験講座を実施した。製作作業では、既に穿孔部を有する正方形の扁平な石材を水中で砥石により粗く整形し、最終的に水中で使用できるサンドペーパーで仕上げる工程により、参加者各自が思い思いの勾玉を作った。また、染料絵具で染色し、各自、撚り紐を製作した上で持ち帰れるように工夫した。大半の参加者は、ほとんど整形してある勾玉に着色する程度の体験講座であるとの認識であったが、約２時間かけての本格的な製作が、かえって好評を博したといえる。

一方、「昔のお金をつくってみよう」では、勾玉製作同様、短い講座を開くとともに、向日市文化資料館の常設展示や「小さな展覧会」のなかでの関連展示遺物を実見したうえで講座を実施した。具体的には市販の鋳型に低い温度で溶ける金属を流し込み、冷却後に銭貨の周囲に生じるバリをヤスリで削り取る工程で体験講座を実施した。参加者は、和同開珎が流通した当時の銭貨の製作工程を理解するとともに、貨幣経済自体についての学習をあわせて体験することができた。

写真１　「勾玉をつくろう」

写真２　「昔のお金をつくってみよう」

今回の体験講座は、いずれも考古資料を実見し、その意義を学習したうえで、勾玉やお金を作製するという方法をとっており、このような講座のあり方は、参加した小学生はもとより引率していただいた保護者にも考古資料を身近に感じていただく機会となった。

写真３　「黄泉の国への葬送儀礼
―古事記と考古学―」

一方、秋季には、従来通りの考古学講座を実施した。いずれも当調査研究センター職員が講師を担当し、最新の調査成果を披瀝するとともに、日常的な研究成果をわかりやすく発表する機会となった。季節的に台風などの影響を受けたが、熱心に受講していただいた。

委細は、文末に委ねるが、木津川における近代治水の状況報告と古墳時代の葬送儀礼に関する担当講師の私見の披瀝は、発表者と受講者が一帯となり得るように、ディスカッションを交えての講座形式をとった。一般的な講座は、往々にして、一方通行の講座が多いが、当該講座のように討議できる状況下にある講座は、受講者に良好な環境を提供できたと考えている。

当調査研究センターでは、年間を通じて「埋蔵文化財セミナー」や「小さな展覧会」などの普及活動を実施しているが、より身近に考古学を感じていただくうえでも当該講座は、有用であったと感じている。また、小学校で歴史を本格的に学ぶ時期に体験講座として勾玉や銭貨を作ることは、学校教育をサポートするうえでも非常に有用な講座であると感じている。　（小池　寛）

「関西考古学の日」関連事業の講座

○夏の考古学体験講座「勾玉をつくろう」第１回　８月18日（日）31名
第２回　８月24日（土）28名
第３回　８月25日（日）23名
第４回　８月25日（日）14名　　合計96名

「昔のお金をつくってみよう」
第１回　８月31日（土）28名
第２回　８月31日（土）26名
第３回　９月１日（日）15名　　合計69名
総計165名

○考古学講座第１回10月19日（土）中川和哉「考古学でみる淀川流域の治水」　14名
第２回11月30日（土）岩松　保「黄泉の国への葬送儀礼―古事記と考古学―」32名
合計46名
総計211名

センターの動向

（平成25年12月～平成26年2月）

月	日	事項
12	7	ふるさと体験学習松井横穴群見学（京田辺市松井ヶ丘小学校：参加者38名）
	8	当調査研究センター職員（技術職員）採用選考試験第１次試験
	18	長岡京連絡協議会（於：当センター）
	20	第９回理事会（於：ルビノ京都堀川）
	24	当調査研究センター職員（技術職員）採用選考試験第２次試験
1	17	水主神社東遺跡第５次（城陽市・新名神関係）発掘調査終了（10/1～）
	18	丹後郷土資料館文化財講座（講師：中川和哉調査課調査第１係長「最新の京都発掘調査」）
	19	椋ノ木遺跡（精華町）現地説明会（参加者77名）
	20	中尾芳治理事椋ノ木遺跡（精華町）現地指導
	21	京都府教育庁指導部文化財保護課長松井横穴群（京田辺市・新名神関係）現地指導
	22	長岡京連絡協議会（於：当センター）
	30	増田富士雄理事下津城跡（京都市）現地指導
2	3	都出比呂志理事、井上満郎理事松井横穴群・下水主遺跡（城陽市・新名神関係）現地指導
	4	石野博信理事下水主遺跡（城陽市・新名神関係）現地指導 平等院旧境内遺跡（宇治市）発掘調査開始
	11	高橋誠一理事ご逝去
	12	京都府監査委員事務局監査
	14	下津城跡（京都市）発掘調査終了（10/16～）
	21	松井横穴群（京田辺市・新名神関係）発掘調査終了（4/22～）
	24	増田富士雄理事平等院旧境内遺跡（宇治市）現地指導
	26	長岡京連絡協議会（於：当センター）
	27	下水主遺跡第４次（城陽市・新名神関係）発掘調査終了（4/22～）

編集後記

２月になってから大雪に見舞われるなど厳しい冬でしたが、ようやく春の兆しが見えてきました。

今年度３冊目となる京都府埋蔵文化財情報第 123 号を刊行いたしましたので、お届けします。

本号では、平成 25 年度における京都府内の埋蔵文化財調査について速報するとともに、八幡市美濃山廃寺で出土したひさご形土製品についての論考のほか、奈良時代の灯明皿の使用実態や木津川市上狛北遺跡の出土遺物について検討した共同研究報告を２篇掲載しました。

よろしく御味読下さい。

（編集担当　松尾）

京都府埋蔵文化財情報　第123号
平成 26 年 3 月 28 日
発行　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の３
Tel　(075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　河北印刷株式会社
〒 601-8461　京都市南区唐橋門脇町 28
Tel (075)691-5121 Fax (075)671-8236

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

『京都府埋蔵文化財情報』第 123 号正誤表

頁	場所	誤	正
25	下から 10 行目	層位から鍛冶炉<u>より</u>やや時期が下るようである。	層位から鍛冶炉<u>のほうが</u>やや時期が下るようである。